青色の猫

猩々緋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
青色の猫

【Ｎコード】
Ｎ８３７７Ｎ

【作者名】
猩々緋

【あらすじ】
右も左も私の常識なんてないものだと言うような風景！私トリップしたんだ！！なんて喜びもつかの間、自分の姿を見て愕然です。なんで猫になってんの！？――――――異世界トリップで猫になってしまった女主人公が、王子様の下で居候するお話です。

その1

気付いたら異世界に居た。そのことには歓喜したさ。なんたってずっとあこがれていたわけだし。

しかし、意気揚々と歩いた先で見た現実には流石に卒倒しそうになったね。

いやに近い地面、水溜りに映った自分の姿は――――――

ロシアンブルー（猫）ってどういうこと？

右を見ても左を見ても、私のいたコンクリートジャングルとは大違い。レンガ造りの家々に、そこらを闊歩する人々。たまに混じっている動物なんかは、私の常識なんか一瞬で投げ飛ばすようなおかしなものばかり。

そんな風景をはじめに見たものだから、「異世界だー！トリップだー！」と諸手を上げる勢いで喜んでいた。そのときは地面に近いことも、四足で歩いていることも、興奮のあまり気が付かなかった。

しばらくしてようやく気が付いたのは、闊歩する人々が私を奇異の目で見ている――いや見下ろしていることだった。

この世界の人は背が高いんだなーなんてのん気に考えたものだが、それにしても差がありすぎた。これが身長のせいだとしたら、ここの住人は２ｍ半だって裕に超える。

そして現れたのが水溜りだ。この体躯では嫌でも水溜りに映った自分が視界に入る。

そして今に至るわけだ。

（ななな、何故に猫に！？ていうかこの世界にこの形の猫なんて居るの！？あ、居ないから視線が恐いのか！！）

トリップした先で猫化なんて予想外だ。と言うか本当何故猫。私はどちらかというと犬派だ。

しゃべろうと口を開いてみても、気の抜けるような泣き声しか出てこない。がっくりと肩をおろしたとき、いきなり首根っこを掴み持ち上げられた。

（うわわ今度は何！？）

突然のことに驚き手足をばたつかせながら顔を上げると、その視線はふてぶてしそうなおじさんの視線と重なった。

思わず全身の毛が逆立つ思いだが、それは思いだけにとどまらず実際に逆立ち、耳や尻尾までもがぴんと立った。

おじさんは品定めするようにじろじろと私を見回す。硬直する私を一通り見終わった後、にやりと笑って私を袋につっこんだ。

袋は猫が入っているにも関わらず乱暴に扱われているらしく、ただでさえ悪い居心地が更に悪い。これは動物愛護団体に訴えられるのではないか。いや猫の言葉じゃ無理か。

いやいやさっきからなんだか考える順序がおかしいな！そんなことより何故私が袋につっこまれたかを思うべきだろこれ！！

当然私をどこかへ運ぶつもりなのだろうが、（万に一つもありえないが）このおじさんが私を飼うつもりならばもっと優しく抱いて運んでくれるはずだ。それとも小動物はこう運ぶのがこの世界の常識なのだろうか。なんとも優しくない常識だ。

そんなことをぐるぐる考えている間に、硬い衝撃が私を襲った。どうやら袋を地面に置いたらしいが、もっと丁寧に扱えってば。

耳をすますと、なにやら話し声が聞こえる。随分静かだが、たくさんの人の気配がする。「面白い品を手に入れました」なんて声がしたと思ったら、袋の口があけられ、そこから図太い手が侵入してくる。

なんだこれ。ホラーか。

目の前に迫る手に恐怖を覚え硬直する。するとその手は今度は首根っこどころか私の体を掴み、袋から引きずり出した。

出た後も持つ手を変えられたくらいで離れない手に嫌悪感を感じながらも、顔を上げれば視界に入るのは数段しかない階段。騒然とする辺りを無視してもう少し頑張って顔を上に向かせると、階段の頂上にある仰々しい椅子に座った無表情の男と、その斜め後ろに控えるように立っている初老の男が見える。

「遥か東の国から手に入れた獣でございます。言語が違いますので名は聞き取れませんでしたが、この大きさです。愛玩動物としていかがでしょう？」

そう言ったのは私を袋に突っ込んだあのおじさんだった。この手も彼のもののようだし、つまり今言っていた獣も私のことなのだろう。

とんだうそつきだなこの男。そこらで拾った猫を「遥か東の国から手に入れた」だって。さっき道で拾った野良猫じゃないか。

抑えられているから体の自由は利かないが、その顔を爪で引っ掻き回したくなる。

珍しいからか相変わらず騒然とした声がうるさいくらいに響く。それが聞こえないように耳を倒した。

「わかった、その獣私が買い取ろう」

椅子に座った男がそう言うと、周囲は更に騒然とした。動物の耳は人間より発達していると言うが、まさかそれを実感する羽目になろうとは。うるさくて仕方ないぞ今。

「ラ、ラディス様！あのような得体の知れない獣をお買いになるのですか！？」

「ああ、興味がある」

控えていた初老の男が、慌てたように椅子に座った男に言う。変わらず無表情ではあるが、その男はけろりと言ってのけた。

周囲の声はいつの間にか薄れていた。多分呆然としているのだろう。私だって空いた口がふさがらない気分だ。仰々しい椅子に座って、様付けで呼ばれている辺りかなり偉い人なのだろう。イメージ的には王様か王子様だ。

そんなお方が見たこともない獣を飼うなんて、そばに居るものとしては心配でたまらないのだろう。
未だなんやかんや言っている初老の男を無視して、ラディス様と呼ばれた男は数人の女の人に声をかける。声をかけられた、中世のメイドさんのような格好をした女性3，4人が私の元までくると、1人が恐る恐る私を抱え上げてどこかへと連れて行った。あー、やっぱり運ばれるならこっちのほうがいいや。

運ばれた先はお風呂のようだった。だた、その広さは一般家庭にはありえないものだったけど。
そこで隅から隅まで綺麗に洗ってもらって、再びどこかへと運ばれていく。洗われている途中、全く抵抗しなかった私に安心したのか、女性は先ほどよりもびくついてはいなかった。
ノック、返事、かちゃりで入った部屋には、机に向かっているラディス（様、はいいか）が居た。女性たちは彼に一礼すると、
「先ほどの獣と、その寝床をお持ちしました」
と、1人の女性が言いながらもう1人の女性が持っている、布団を敷いたかごを見る。ラディスは机上に向けていた視線をちらりとこちらによこし、「そこら辺においておけ」と言って視線を戻した。
ようやく地に足をつけた私のそばにかごを置いて、女性たちはまた一礼して部屋を出て行く。
その様子を気に止めた風もなく黙々とペンを走らせるラディス。何をしているのかと近づいてみるも、机上が見えるはずもなかった。
部屋を見回してみると、大きなベッドに飾りテーブル、タンスに本棚に目の前の机、という、なんとも殺風景な部屋だった。ベッドがあると言うことは寝室なのか。ならばこんなものか？と首をかしげていると、
「どうした？」
と、頭上から声が降ってきた。まあこの部屋には今現在ラディス

と私しかいないのだけども。
彼を見ると、変わらぬ無表情で、ペンを持ったまま私を見ていた。
なんでもないよー部屋見てただけだよーなんて気持ちを込めて「みゃー」と鳴いてみれば、一瞬きょとんとした後、ようやくペンを置いて私を抱え上げた。
「ずいぶんかわいらしい泣き声だな」
そう言って、私を自分の膝の上に乗せて、私の頭を撫で始めた。
動物に話しかける人は、大半がやさしい人なのだと思う。
彼もきっと、そういう人なのだろう。

その2

しばらく頭を撫でられたあと、「仕事があるから」と膝から降ろされた。降りてからもラディスを見ていると、もう一度頭を撫でられる。その顔は少し笑っているように見えた。

「そういえば、名前をつけていなかったな」

はたとして彼は言う。そういえば名乗ってないんだ。いやいや、ていうか名乗れないじゃん。

ううむ。と悩んでいると、彼も同じように私を見つめて悩んでいた。

流れから言うと、私の名前を考えているのだろうか？さっき仕事があると言っていたのにそんなことに時間を割いていいのか。

私は首をかしげながら彼を見つめ返した。彼は未だに考え込んでいるようで、ふと視線を窓の外に向ける。

「ああ、そうだ。ソラにしようか。お前の瞳も同じ色だな」

え、そんな色してたの？

予想外のことを言われた感じだ。私の見たことのある猫は大体金か黒だったわけだし。水溜りでは色まではよくわからなかった。

自分の手（前足）を見ながら思っていると、不意にラディスに抱え上げられる。

「体も青いが・・・どちらかというと紫なのか？不思議な色だな」

それは私も思ったことある！と、同意の一鳴き。すると彼は、今度こそわかりやすく微笑んだ。

そしてはっとしたらしい。

「・・・悪い、仕事を終わらせなければ」

そう言って私を床に降ろす。なんかわかるなぁ、小動物と居ると仕事忘れるよね。それが基本無表情なラディスにも当てはまると言うことがなんだか嬉しかった。

改めて椅子に座りなおした彼は、頭を掻きながらペンを持ち、机

上に視線を向ける。
うむ、仕事があるならば仕方がない。暇も甘んじて受け入れようではないか。・・・なんて偉そうなことはいえないが、どうも私がそばに居ると仕事の邪魔をしてしまいそうだ。
あれだよ、新しく手に入ったものっていじくりまわしたいじゃないか。
ラディスはお偉いさんみたいだし、仕事もたくさんあるんだろうなぁ。なんて思った丁度その時にドアがノックされ、一人の青年が入ってきた。その手に持っている用紙の束は仕事の追加だろうか。
それが机に詰まれると、机の真下に居る私にもその頂上が見えるようになったので、相当高く積まれているのだろう。
それを嫌な顔ひとつせずに受け取るラディス・・・偉い人は大変だなぁ。
そうとなれば、私にできることはただ一つ！邪魔をしないことである！！・・・という結論が出たのだが、果たしてそれは何処に居れば達成できるのか。
部屋を見回してみる。殺風景な部屋なので隠れる場所は無いに等しいし、ベッドの下――――は埃っぽそう。

あ、ベッドか！！

思いついた私は一目散にベッドへと駆け寄る。上れるのかは疑問だったが、流石は猫の体。余裕で上れた。
突然の行動にラディスが驚いているとも知らずに、私は予想外のもふもふ加減を堪能していた。一歩進むたびにバランスが崩れる。
人間の体ならもうちょっと安定するんだろうけどな、なんて思いながら枕元まで行き、もぞもぞとシーツの下に潜り込んだ。うは、何これ気持ち良いな。
「ソラ？どうしたんだ」
ラディスがシーツを軽く持ち上げて覗き込む。既に伏せの姿勢で

敷布団をたしたし叩いていた私は、その姿を恥に思いながら彼の顔を見上げた。・・・って若干笑ってらっしゃる！！

あまりに恥ずかしくて丸くなると、「眠いのか」と背中を撫でられる。ええもう、そういうことにしてください。よかった、猫の頬は赤くならなくて。

沈黙を守る様子を肯定と取ったのか、ラディスは「おやすみ」と丁寧にシーツを駆けてくれた。

ちらりと見てしまった彼の微笑みは、殺人級だと思う。

今更だけれど、ラディスは整った顔をしている。いわゆる、イケメン。最初こそ無表情で冷たい印象があったのだけど、いやはやイケメンの笑顔と言うものは万国共通、いや全次元（？）共通なんだなぁ。

・・・なんて考えていたら、いつの間にか寝ていたらしい。おっかしいなー、さっきまで太陽がそこにあったのに。今あるの満月だよ。ウサギが餅ついてるよ。

実際、本当に寝るつもりはなかった。ラディスの視界に私が入らなければいいなーと思って、簡単に隠れられるのはここだと思った。

しかし、予想外に気持ちよかった。それが原因だちっくしょー。

もぞもぞとシーツから出で机を見ると、未だそこで仕事をしているラディスが居た。机の上の用紙が大分減っているが、まだ終わっていないらしい。

私はひとつあくびをして、目をこすろうとして口に手をぶつけた。猫の口（と言うか鼻）は出っ張ってるんだった。

慣れたと思っていたのに。まあまだ一日――――も経ってないしな、この姿。

またバランスを崩しながらなんとかベッドの端まで行く。降りようと思っていたはずなのだが、床までの距離を随分長く感じた。

あれ、恐いんだけど。バンジーする気分？

いやこのくらいなら猫だって降りてんじゃん。階段だって上り下りしてんじゃん。
・・・いや無理！！
「みゃーっみゃぁー！」
「ん？起きたのか」
諦めてラディスに助けを求めた。ゴメンね、仕事中に。
彼は私の元まで来ると私を抱き上げてくれた。これは大丈夫なんだけどな。むしろ安心する。
「よく寝てたな」
言いながら背中を撫でてくれる。ええ、私にも予想外でした。
「腹は減ってないか？もう大分遅いが」
そういえば減った気がする。肯定するように鳴くと、わかったのか私を抱えたまま部屋を出て行く。
いや、降ろしてくれていいんですけども。というか重くないのかな。
・・・猫になってまでこんな心配をするとは。

着いた先は食堂、というか高級レストランの食卓？だった。食事の時間は当に過ぎてしまっているらしく、そこは綺麗に片付けられていた。
そこを素通りして、厨房へ来る。中には下ごしらえ中のコックが数名いた。
「お、王子！！いかがなさいました！？」
「すまん、こいつに飯を作ってくれないか」
ラディスを見るなり慌てて姿勢を低くするコックたち。今彼らが「王子」とかいった気がするが・・・。いやまさかね、確かに偉い人みたいだけどね。
「は、はぁ、かしこまりました。・・・王子のお夜食はいかがいたしましょう？」
「俺はいらん」

「ですが、ご夕食も召し上がっておられませんし・・・」
「いらん」
聞き捨てならない台詞に、「王子」なんて単語はどこかへ吹っ飛んでしまった。
ご飯はいらないだって？何言ってるのこの人。
抗議を（無論みゃーみゃーと）言ったが、ラディスはそれを催促の声だと思ったらしい。こんなときだけできないのか以心伝心よ。いやさすがにこんな細かいことまで伝わったらそれはもうテレパシーだけど。

その2（後書き）

なんだか長くなりそうなので途中で。

感想くださった方、ありがとうございました！！とっても嬉しくて、一日中にやけっぱなしでした。

こんな拙い小説ですが、がんばりますので見守っていてください。

その3

コックたちも私が鳴くのは空腹だからだと思ったのか、大慌てでご飯を作ってくれた。皿の中にたくさんの種類の料理があるところをみると、何を食べるのかかなり迷ったようだ。

どれもおいしそうだな・・・と床に置かれたそれらをジッと見つめて、思いついた。

こぼさないように慎重に、慎重に・・・と、鼻先で皿を押し、椅子に座って私の様子を眺めていたラディスの目の前まで持っていく。

そして彼の顔を見上げると、しばらく見つめられ、首を傾げられた。

ぬうう、やはり言葉が通じないのは不便だ。流石に猫用に出されたものを食べろとは言わないが、ご飯を食べて欲しくてしているのだが・・・。

とりあえず更にお皿を彼の方に寄せる。

「・・・食べさせて欲しいのか？」

違う！

がっくりとうな垂れると、ラディスは困ったように私を見る。

「悪いな、わかってやれなくて」

・・・なんで謝られてるの、私。

こうなったら直接口に突っ込んで――――――って、私今器用な手は持ってないんでしたねー！！いい加減慣れろよもう！！さっきは鼻先使ったじゃん！！

半ばヤケになりながら皿のものを咥え、ラディスに寄って行く。ぐいぐいと口を寄せると、

「もしかして、俺に食べさせたいのか」

ようやく感づいてもらえた。そうそう、と頷くのも何かおかしいので擦り寄ると、彼は苦笑した。

「いや、俺は食べる気は・・・」

拒否しようとするラディスに更に口を寄せる。自分から膝には乗れないので脚に縋るのみだが、それでも効果はあったらしい。しばらく悩んだ後、

「・・・コック長、何か軽いものをくれ」

額を押さえながら言った。

いやあ、満足です！ここの料理はあんなにおいしいんだ！

ラディスの部屋への帰り道、今度は降ろしてもらって自分で歩いている。その横を、口元を押さえたラディスがゆっくり歩く。

コックたちが影で話していた話によると、ラディスが夜にご飯を食べたのは随分久しぶりらしい。確か、3ヵ月ぶり？私だったら絶対無理だな。

しかしあんなに仕事があったのだから、もしかしたら疲れから食べることを拒否してたとか・・・？そういうことには詳しくないので、よくはわからないけれど。

けれどそうなのだとしたら、どうにかしてその疲れを取ってもらいたいなぁ。

そうだ、動物セラピーって言うのがあった気がする。私みたいな似非猫でもマネできるかな。

ラディスを見やると、視線に気付いたのか口元を抑えていた手を外して微笑んでくれる。・・・無理させたのだろうか。

部屋に戻ってきて再度机に向かおうとするラディスを何とか引き止め、その脚を何とかベッドへと向かわせた。

「お前、小さいくせに強引だな」

彼は言いながらベッドに腰掛けると、背中から倒れこんだ。息を吐くあたり、疲れていることがありありとわかる。

よし、そのまま寝ろ！いやこれかぶってから寝ろ！と、私はベッドによじ登ってシーツを引っ張る。本当、この体では苦労するなぁ。

「まて、着替える」
頭を抑えられ、作業を止められる。そのまま机に向かうまいな、とじっと見ていると、苦笑しながらがしがしと撫でられた。
それでも見ていたのだが、服を脱ぎだした時点で目を逸らしたのは言うまでもない。

無事（？）にベッドに戻ってきたラディスにもう一度シーツをかけようと苦心していると、抱きかかえられ、自分からもぐっていった。
私は枕の横に移動する。と言っても、枕だかクッションだかわからないものがたくさんあるので、そのひとつに寄りかかる感じだ。
「お前そこでいいのか？」
手を伸ばしてくるラディス。ふと、この部屋に入ってきたときに一緒に持ってきてもらったかごを思い出した。
そんなのもあったなーなんて思うが、今は動物セラピー実験中だ。これでも実験中だ。
伸びてきた手に一度頬を摺り寄せ、丸くなって寝る体勢に入った。それを肯定ととって、私を一撫ですると彼も目を閉じた。
――――と言っても、私は昼間随分と寝てしまった。今更寝れるはずもなかった。
どんなに目を瞑り続けても、丸まり続けても、眠りに落ちれない。
参った。夜だって長いのに。
しばらくそれを繰り返していたが、不意に聞こえた呻く声に目を開いた。視界に入ったのは、顔を苦しそうに歪めたラディスだった。
魘されているのかな・・・？
近づいてみると、呻き声は確かに彼から聞こえるし、冷や汗も掻いている。これでは途中で起きてしまうんじゃないか、と心配になり、どうにか落ち着かせられないかと考えた。
こういうときはあれかな、やっぱり撫でてあげるとかしたほうがいいんだろうか。いやでもさ、でもさこの手だよ？ていうか前足だ

よ？撫でられないじゃん。滑んないじゃん。できてぺしぺし？いや叩いてどうする。
悶々と考えてみるが、なかなかいい案が浮かばない。その間も苦しそうに呻くので、とにかく身を摺り寄せた。
・・・そっか、私今猫なんだ。
ふと気が付いて、思考を改めた。さっきから人間的思考で考えていたが、動物的思考ならどうだろう。
近所の犬や猫を思い出しながら考えると、単純な答えが見つかった。

・・・舐めればいいのか。

人間だったら絶対できない行為だ。だって恥ずかしすぎる。
今だってできる気はしないが。だって人間的思考思いっきり残っているのだし。
しかし、このままだとラディスの安眠（かどうかは今の状態ではなんとも言えないのだが）が妨害されてしまう。
どうせ見ていない。私しか知らない。
ええい、女は度胸って言うじゃない！！というわけで！！

・・・効果はあったらしい。眉間の皺はなくなったし、呼吸もいくらか安定してきた。
とりあえず良かった。うん、良かったんだよ。・・・明日まともに顔見れるかなぁ・・・。
頭を抱えていると、また少しずつ呻き声が聞こえてきた。
まって、あれを一晩中は無理。羞恥心で死んじゃう。
悩みに悩んだ末、彼の胸元、横たわった腕の間に潜り込んで眠ることにした。
できるだけ彼と密着する。ここにあったかいのがあるよ、生きて

いるのがあるよ、と教えるつもりで身を寄せた。すると彼の腕がもぞもぞと動き、私をゆるく抱えた。それだけで呼吸が軽くなる。

初めからこうすればよかったと後悔したのは、言うまでもない。

その3（後書き）

まさかのミスを発見したので修正しました。

その４

誰かに背中を撫でられているのを感じて目を覚ました。目に入ってきた前足を見て、夢ではなかったんだとうれしくなる。
視線を少し上に向けると、私を見つめているラディスの眠たげな目があった。
ぼぉっとした様子で私の背中を撫で続けているので、多分まだ半分寝ているのだろう。起こすのもなんなので、そのままおとなしくしていた。
１０分くらいして、ドアをノックする音が聞こえた。ラディスは未だ寝ぼけているようで、返事をすることもそちらを向くこともしない。・・・低血圧なのだろうか。
ドアの向こうの人は困らないのだろうか、と思っていると、ドアの開く音がした。返事がないのは承知でノックしたらしい。
ベッドに寄ってきたその人は、昨日私をお風呂に入れてくれた女性の一人だった。口元や所々に皺が刻まれているので、そこそこの年齢なのだろう。
その女性は私がベッドの中に居るのを見て一瞬驚いたようだが、すぐに気を取り直してラディスを起こしに掛かった。おお、プロっぽい。
「ラディス様、起床時間です。お目覚めください」
何かの呪文かと思った。偉い人ってみんなこうやって起こされるのだろうか。いやここだけなのだと願いたい。
こんな呪文みたいな台詞を言っただけで、女性はそれ以降何もしない。こんなんで起きるんだろうか、と本気で思ったが、隣にあった体が動いたことから効果はあったらしい。彼女は魔法使いか。
「・・・おはよう、リズメイド長」
「おはようございます」
起き上がり、女性を見たラディスが挨拶をする。リズという名前

らしいその女性も、真顔のまま挨拶を返した。
私はラディスの腕が離れた隙にお座りの体制をとる。む、やっぱりこのふかふかベッドの上では動きづらい。
というかメイドなのか。しかも長なのか。感心しているとラディスが振り返り、私の頭を撫でた。
「ソラも、おはよう」
私も挨拶を返すつもりで、みゃあと鳴く。するとラディスは微笑んで私を抱え上げた。
「名前をお付けになられたのですか」
やはり真顔のリズさんが問うてくる。ラディスは「ああ」とだけ応えて私を床に降ろした。
「左様で。・・・朝食はいかがいたしましょう。こちらで？」
「ああ、ここでいい。ソラの分も持ってきてくれ」
それを聞くと、リズさんはちらりと私を見た。なんでしょう？と私は首をかしげる。
「承知いたしました・・・ですが、そちらは何をお食べに？」
視線をラディスに戻して、リズさんは問うた。表情が少し変わって、困惑気味である。
「なんでも食べるようだ。昨日も晩を貰いにいったし、コック長はわかるだろ」
それを聞くと、リズさんは再度「承知いたしました」と言って部屋を出て行った。その隙にか、ラディスが着替え始める。その姿を視界に入れないように、私は後ろを向いた。
しかし、メイドさんがいるのなら、着替えを手伝ってもらったりしないのだろうか？あれ？それはお姫様？
答えのわからないことをぐるぐる考えていると、ふとあることを思い出した。思い出してしまった。
そう、昨夜の動物的なんたらにしたがって起こした行動である。
これは忘れているべきだった！！なぜ思い出した！！きっかけなくない！？

羞恥心からうずくまっていると、「どうした？」とラディスが私を抱き上げた。いつもの後ろ足まで抱える感じではなく、わきの下に手を入れて持ち上げている感じだ。ゆえに体は伸びて足ぶらんぶらん。

ラディスは既に着替え終わっていたらしく、髪までもが癖ひとつない。早着替えだ、なんて感心してしまったが、実際は私の悩んでいる時間が長かっただけである。

しかしなぜこういう時に限ってこの持ち方なのかね。顔を見ることになるじゃないか。羞恥心で死んじゃうぞこのやろう。

なんて理不尽な考えを起こしてみたりしたが、ラディスは何をされたかなんて微塵もわからないのだ。罪はない。

ここはもう、私が自分で収拾するしかないのだ。よし、こう考えよう。あれは夢だ。夢での行動なんて私の知ったこっちゃない。私の夢だとしても、知ったこっちゃない。

我ながら意味不明な結論に至ったものだ。けれど私の単純思考回路は、それだけで羞恥をなくしていった。ラディスの顔だってもう普通に見れる。

私って簡単なやつだなぁと心の中で笑っていると、ノックの音が聞こえた。今度はラディスが返事をし、それからリズさんが入ってくる。

リズさんの引いてきたカートには、おいしそうではあるけれど少し少なめの、冷めた料理が数点、それから私用に小さめのお皿に盛られた料理が乗っていた。冷めた、と言うのは、スープですら湯気を立てていないのだから一目でわかることである。

偉い人の料理が冷めているって言うのは本当らしいですね。

そういえば、部屋で食べるとは言ったけど、何処で食べる気なんだろう。この部屋のテーブルと言えばベッドの横に備えられている本当に小さいものか、昨日ラディスが仕事をしていた机だけである。

まさか仕事机で食べないよねーなんて思っていたが、そのまさからしい。料理は着々と仕事机に並べられていった。

大雑把なんだなーと思いながら、椅子に座るラディスに付いていき、その隣に座る。リズさんは私の目の前に丁寧にお皿を置いてくれた。
お礼の代わりに一声鳴くと、リズさんが僅かに肩を振るわせた。おや、動物が嫌いなのだろうか。
それなのに私のお風呂まできちんとしてくれたのだ。今度は恐がらせないように、心の中でお礼を言った。

朝食を済ませ、レモンティーで一服すると、ラディスはすぐに仕事を始めた。というか、始めざるをえなかった。見計らったかのように、昨日の青年が用紙の束を持ってきたのである。
その青年だけでなく、次々といろんな人が用紙だったり冊子だったりで仕事を持ってくる。机の上には既に山ができていた。
ラディスは昨日のように私に気を取られることもなく、着々と仕事をこなしていった。その隣で私は暇を弄んでいるわけだが、昼になったら彼にちょっかいをかけようと思う。やっぱり適度な休憩は必要だと思うし。
そんな目論見をしていると、本日何度目かのノックが聞こえた。ラディスは机上に目を向けたまま返事をする。
入ってきたのは、昨日仰々しい椅子の後ろに控えていた初老の男と、白衣を着た数名の男だった。
初老の男は、医者か、博士か、と予想している私を一瞥すると、ラディスの目の前まで歩いていく。
「失礼します、ラディス様。そこの獣を少々調べさせていただきたいのですが」
それを聞いたラディスは顔をあげ、初老の男と、その後ろに居る白衣の男たちを見た。
「・・・すまんキーリス、もう一度、詳しく言ってくれ」
「ですから、そこに居る獣を、危険がないかどうか調べたいので

す。見たことのない種類ですし、獣と言う者は気性が激しい。どんな武器を持っているのか認識しておかねば、どうなるかわかりませんぞ」

あ、私の話か。と無意識に背筋を伸ばした。

その5

まぁ、この世界に私みたいな獣は居ないのだろうと思っていた。道端で見た犬っぽいのも、いろいろと付属がついてキメラのようだった。

新種であるなら調べたいだろうし、ましてやラディスはお偉いさんである。調べなくてはいけないのだろう。

じゃあ何で昨日のうちに来なかったんだろう。と考えていると、「昨日は寝ているからなんて理由で帰されましたが今日こそは・・・」とキーリスが言っていた。そんな理由で帰したラディスも、帰されたキーリスもすごいと思う。

とにかく、上司のそばに危険かどうかもわからないものが居ては、下に居る人は不安でたまらないのだろう。正直体を見回されるとか触りまくられるとか嫌だが、そこは仕方がない。

覚悟を決めた私の横で、ラディスは不安げに私を見ていた。今更になって私に恐怖を覚えたのか？と思ったのだが、抱き上げたことから違うらしい。

「ラディス様！」

「悪い・・・お前らの「調べる」というのはどうにも不安でな・・・」

言いながらラディスは私を強く抱く。

どうやら、ここに動物が連れてこられるたびにキーリスたちが「調べて」いたそうだ。その度に動物たちの絶叫が聞こえるらしい。

どんな調べ方してるんだ、と不安になってしまった。

「それは安全を確かめるためには仕方のないことなのです。・・・ラディス様、王子であるあなたのお側にそのようなよくわからない獣が置かれて、我らは心休まる時がないのですぞ」

またも出てきた王子という単語。それは明らかにラディスを指していた。

予想していなかったわけではないが、ラディスは王子様だったらしい。驚くと同時に、ならばなおさら私の安全性を証明しなくては！と思って、ラディスをじっと・・・というか、じとっと見つめた。
相変わらずの以心伝心振り、あるいは読心で、彼は私が何を思ったのかわかったらしい。多少戸惑っていたが、
「・・・俺も立ち会う。それでいいな」
了承の意を示しました。

流石にその場で調べるわけではなく、移動した先は怪しい薬や器具の置いてある実験室のような――――場所ではなく、向かい合わせのソファの間にテーブルが置かれた、応接室のようなところだった。
そこで私はラディスの膝の上で、相手にお腹を見せる形で座っていた。お腹にはラディスの手が回っている。
白衣の人たちがなんともいえない視線を送ってくるのだが、ラディスはそんなもの丸無視である。いやいやラディスさん、これじゃあ調べるも何もあったもんじゃないじゃないですか。
「・・・まぁいいでしょう。生態は後日調べさせていただきます。本日はとりあえず、武器になりそうなものを調べましょう」
なんだか不吉な言葉が聞こえた気がしたが、きっと私の聞き間違いだ、うん。
メガネをかけた白衣の男が提案すると、白衣を着た女性、丸坊主の白衣の男が同意する。今居るのはこの三人だが、面倒くさい。前から白衣A、白衣B、白衣Cと呼ぼう。適当だなんて言わせない。
白衣三人衆は私を見ながら議論を始めたようだ。やはり牙じゃないか、いや何か隠しているのかも知れない、もしかしたら魔法が使えるのかも。
この世界には魔法が使える動物がいるんですか！ものすごく興味

深いです！！
彼らが言ったことは仮説に過ぎないのだけれども、私は期待に目を輝かせていた。
「ソラ、お前武器になるものなんてあるのか？」
頭上からラディスの声が降ってきた。一応動物ですから、身を守るためには備えていますよ。・・・多分。
猫と言ったらやっぱり爪だろうか、と自分の手を見つめる。僅かに見えはするが、正直どうやって伸ばすのかがわからない。
まあいいか、これが武器だ！と両手を挙げて口を開き、ラディスを見上げる。彼を見るためには顔を真上に上げなければならないので、ちょっとキツイ。
「お前の武器ってこれか？」
ラディスは片手で私の手の一方を掴み、もう片手で牙に触れる。ちょ、手はいいけど牙はやめてマジで。
牙は肉を食べる動物には必ずと言っていいほど付いているので、すぐに納得したらしい。ラディスは私の手をいじり始めた。
一見すれば何の変哲もない手なので、ラディスは僅かに首を傾げる。
「おい、これがこいつの武器らしいぞ」
気が付けば動物の武器について熱く語っていたらしい白衣三人衆が、驚いた様子でこちらに向き直った。その勢いに私が驚いたが、ラディスはそうでもないらしい。肝が据わってらっしゃる。
「この・・・前足がですか？・・・如何様（いかよう）な武器なのです？」
「知らん。尋ねたら指し出してきたのだ」
ラディスは私の手をいじりつつ、白衣Ａの質問に答えた。ちょっと、それじゃ天然さんみたいじゃないか。ほら白衣Ｃが「何言ってんのこいつ」みたいな目で見てるよ。ていうか王子にその視線って、度胸あるなおい。
「その獣は人語を理解しているのですか？」
「おそらくな」

白衣Bが私をまじまじと見ながら尋ねる。それにラディスは曖昧に答えた。流石にここは肯定できないらしい。確認できないもんね。
「では、少しテストをしてみましょうか」
と、話が大いにずれる方向へ向かった。武器はどうなったコラ。ていうかラディスさん、肉球堪能してるだろ。絶対してるだろ。

テストは単純なものだった。質問に対し、「はい」の時にだけ鳴く。それだけだ。
「・・・本当に理解しているようですね」
白衣Cが感激したように言う。目なんか輝いちゃってるし。
「頭がいいのでしょうか。ぜひ計算もさせてみたいです」
白衣Aも目が輝いている。
「となると、その前足が武器だと言うのも本当なのでしょうか」
白衣Cが、一人冷静に言う。もしかしてクールキャラなのだろうか。
ようやく武器の話に戻り、内心ほっとした。早く終わらせてくれ。
「よく見ると・・・爪らしきものがありますね。これを使うのでしょうか」
そうそう。内心で頷くも、どう見てもこのままでは武器として使えない。短すぎるのだ。
本当どうやれば出るのこれ。怒ったときとか威嚇のときとか、そういうときに出るんだよね。
・・・今怒る状況じゃないし。威嚇する対象居ないし。
半ば自棄になりながら、爪伸びろ爪伸びろと念じてみた。が、もちろん無理。
手を押せば爪が出ると聞いたことがあるが、果たして今居る人間が押してくれるのかどうか・・・。頼みの綱は未だにいじっているラディスである。ていうか本気で気に入ったんだな。
白衣三人衆が議論を交わしている横で、私は今まさに手の甲に乗っているラディスの指を押してみた。が、一緒に私の手も降下する。

それでもその行動を続ける私を見て、ラディスは直感したのか、指に力を入れた。

「ああ、なるほど。隠しているのか」

ラディスに拍手を送りたい気分です。三人衆も出たり引っ込んだりする爪を見て、感嘆の息を漏らす。

結局私の武器は、危機的状況にのみ現すことのできる隠し刀ならぬ隠し爪、ということでまとまった。

その6

更に調べたそうな白衣三人衆の視線を無視して、ラディスは私を抱えて部屋を出た。もしかしてこれから絶叫せざるをえないような検査をされるのか、と内心びくびくしていたのでほっとした。

ラディスの腕の中で、きょろきょろと辺りを見回す。昨夜は暗くてちゃんと見れなかったが、真っ白な壁に彫刻された立派な柱、点々と置かれた調度品など、確かに城と言っても過言ではない風体だ。

「落ち着かないみたいだな、ソラ。少し散歩するか？」

頭を撫でながらの提案に、私は快い返事を返した。

まず向かった先は中庭だった。噴水を中心として十字の通路があり、その他の地は全て草花で埋まっていた。

通路に降ろしてもらい、すぐ傍にある花に近づく。

「通路から出るなよ。折角庭師が育ててくれているんだ、荒らしては勿体無い」

わかっていますとも！と一度ラディスを見やり、すぐに視線を花に戻す。今目の前にあるのは、赤と薄桃色の花びらが、交互に、幾重にも重なった、なんとも愛らしい花だった。道なりに歩いていけば花の種類が変わり、今度は百合の花が鈴蘭のように垂れ下がっている花が見られる。しかしその花びらは白ではなく、うっすらと青みがかっていた。

しばらく歩き回ってみると、通路によって四つに区切られたこの中庭は、それぞれが四季を現しているのだと気が付いた。

最初に見ていた区域は花が咲き誇っていたのに対し、左隣は花びらが散り始め、種の準備をしていた。後ろを振り向けば未だ蕾を作り始めたばかりで、斜め向こうにいたっては花の陰など皆無だ。

そこまで思い至ったところで、ラディスが傍にいないことに気付

いた。何処に行ったのかと見回せば、彼は噴水の縁に座りながら私を眺めていた。
うっすらと微笑んでいることから、酷く退屈だったわけではないらしい。
しかし、「酷く」ではないだけで、「退屈」なのだったらどうしよう。
ラディスの方へと寄りながら、彼と花を交互に見る。
「俺のことは気にしなくていいから、好きなだけ愛でていろ」
頭を撫でて言ってくれるが、やっぱり迷ってしまう。
とりあえず一通りは眺めたのだし、人を待たせてまで自分の好きなものに没頭する気はない。
私は噴水の縁に飛び乗り、ラディスの隣に座った。
「・・・他のところにも行くか？」
彼の提案に頭を摺り寄せると、再び私を抱え上げ、来た渡り廊下の反対側にある渡り廊下を横切る。
しばらく歩くと、人がちらほらと見えるようになってきた。その全員が、ラディスを見て深々と頭を下げる。それを気にした風もなくラディスは歩き続ける。前方に馬小屋のようなものが見えてきた。
「お、王子！いかがなさいました！？」
馬小屋の前にいた数人が、ラディスの突然の登場に目を剥き、深々と頭を下げた。所々土に汚れ、何人かは手に水の入った大き目のバケツを持っている。ここで飼育をしている人たちらしい。
「散歩に来ただけだ、気にするな。普段どおりにしていろ」
無茶を言いなさる。案の定飼育員たちは困惑気味に顔を見合わせていた。
≪まったくこの王子は、もっと周りを見ろっての≫
≪いやいや、言い方が悪いだけじゃない？≫
≪あと無表情なところとか？≫
どこかから聞こえた声に、ピクリと耳を立てる。何処からかと視線を巡らせるが、誰もが様子を伺うようにラディスを見ているだけ

で口を開いてはいない。
巡らせた後視界に入ったのは、馬小屋の中に居る存在だった。
確かにぱっと見は馬だ。しかしその額には、銀色に光る長い立派な「角」があった。所謂「一角獣」である。
最初に目に入ったのは、全体的に白く、銀色の鬣（たてがみ）を持った、額から角を生やしたその動物。その隣には全体的に黒い、同じく額から銀色に光る角を生やした同じ形の動物。更にその隣にも全体的に灰色の・・・と、計3頭の馬のような動物が居た。
ラディスはその内の1頭――――白い馬の様な動物に近づくと、横に回ってその体を撫でた。彼に抱かれたままの私も自然と近づくことになる。大きな瞳と目が合った。
≪ああ、貴女が新しく来たっていう子？初めまして≫
突然先ほどの声が聞こえ、それと同時に目の前の動物が鼻を鳴らした。あまりの驚きに無意識に身を引くと、ラディスが安心させるように撫でてくれる。
≪え、ええと・・・ハジメマシテ・・・？≫
試しに銀色の鬣をなびかせる目の前の動物に話しかけてみる。やはり「にゃー」と言っているようにしか思えないが。
≪ええ。ここには慣れた？って言っても昨日来たばかりだもの、まだ難しいかしら。そんなに小さいと大変よね≫
会話が成り立ったらしい。更に驚いていると、
≪お、新入りが居るのか！？見たい見たい！！邪魔だ王子退けろ！！≫
後ろからとんでもない言葉が聞こえてきた。
≪おいもっと敬えってー。そいつのおかげでめし食えてんだからさ≫
ついで聞こえた声は、言葉に反して敬ってはいない。
≪ちょっと、黙りなさい≫
目の前の動物から、鋭い声が発せられる。それに他の二つの声が黙り込む。おお、彼女（？）がリーダーか。

私がジッと見つめていたからか、ラディスが彼らを紹介してくれた。
「ソラ、この銀色のシエスシエラがフィリシア、隣の黒いのがリグナス、その隣の灰色のがアルファだ。こっちの2頭はフィリシアの子だ」
彼らの種類はシエスシエラというらしい。そして目の前の彼女はリーダーではなく母親だった。母は強し。
≪貴女はソラって言うの？よろしくね≫
≪あ、はい。よろしくおねがいします≫
フィリシアが鼻を近づけてくるので、同じように私も鼻を近づけた。これで挨拶になっているのだろうか。
「もう恐くないか？」
ラディスの問いかけに、頭を摺り寄せて返事をする。彼は「そうか」と微笑んで頭を撫でてくれた。
≪あら、無表情王子を微笑ませるなんてすごいわね≫
少し驚いたようにフィリシアが言う。無表情王子・・・確かに人に対して笑っているところを見たことはない。
≪貴女随分と気に入られているのね。いいことだわ≫
彼女は明るい調子で言うと、≪あ、そうそう≫と思いだしたように言う。
≪この奥にも、ワイバーンが2頭いるの。挨拶しておきなさい≫
ワイバーン。ドラゴンの体に、手の代わりに翼があるあれだろうか。まさか知っている種類の生き物がいるとは思えなかった。
言われた奥のほうを覗き込むが、何かがあるようには見えない。じっと見ていると「行ってみるか？」とラディスに聞かれたので、「是非に」とひとつ鳴いた。

その7

シエスシエラの小屋を更に奥に進むと、牧場のように広い平野に大きなドラゴンが居た。なにせラディスを丸呑みできそうなほどの大きさである。彼より小さい私は萎縮してしまった。

「ソラ、大丈夫だ。彼らはおとなしいから」

ラディスが背中を撫でてくれるが、これは自分の意思ではどうにもできない。

ラディスに気が付いたのか、オレンジに近い赤の身体を持ったドラゴンが頭をこちらに近づけてきた。彼は私たちのすぐ隣に頭を降ろし、ラディスはその鼻筋を撫でた。

「こいつはグランツ。父上のワイバーンだ」

ぎょろりとした金色の目に見られ、身体がすくむ。

≪は・・・はじめ、まして≫

≪ああ、初めまして。新しく入った子かい？≫

グランツは、まるで温和なおじいさんのようにゆったりと喋った。その喋り方にほっとして、緊張が少しほぐれた。

≪お前さんのように小さいもんには、私は恐いかねぇ。すまないねぇ≫

≪い、いえ、私の方こそ、恐がってごめんなさい≫

そう言うと、彼は僅かに目を細めた。

心なしか緊張の解けた私を見て取ったのか、ラディスは私の頭を撫でながら口を開いた。

「もう一頭ワイバーンが居るんだが、大丈夫か？」

その声にあわせてグランツも頭を上げ、後方を見た。同じ方を見てみると、少し離れた位置に寝ているワイバーンが居る。こちらは濃い赤色の身体だ。

多分大丈夫だ。見た目は（大きさもあり）恐い彼らだが、性格は温厚らしい。多分大丈夫だ。

半ば言い聞かせるように考えた後、ラディスに頭を摺り寄せ、了承を示した。
彼は微笑むと、懐から細い笛のようなものを取り出し、それを吹いた。風が吹いたような音が鳴る。
奥に居たあの濃い赤色のドラゴンにもそれは聞こえたらしく、起き上がりこちらへとゆっくり歩いてきた。飛ぶほどの距離はないにしても、その姿はなんだか気が抜ける。
私たちの元へ辿り着いた彼は、グランツとは反対側に、同じように頭を降ろした。その鼻筋をラディスが撫でる。
「こっちはガレリオ。俺のワイバーンだ」
愛しそうに鼻筋を撫でながら紹介してくれる。
≪あの、はじめまして≫
≪はい、初めまして。新しく入った子だね？同じ主を持つ者同士、よろしくね≫
こちらも、気が抜けるほどゆったりと喋るドラゴンだった。ワイバーンというのは皆そうなのだろうか。
≪君はいつここに来たの？もう慣れた？≫
≪昨日、です。慣れるのはまだ・・・≫
≪そうさなぁ、昨日の今日じゃぁ、まだ慣れられんわなぁ≫
≪じゃあ、あのおじいさんの身体検査は受けた？≫
≪あ、あれはなんとなく緩めにしてもらいました≫
≪本当？いいなぁ、僕はがっちりやられちゃったもんだから、もうあのおじいさんの顔すら見たくないね≫
≪はぁ・・・≫
喋り方はゆったりなのに、随分喋るドラゴンである。そんな彼を見るグランツの目は孫を見るようである。おじいちゃんか。
私がいつまでも彼らと話していたからか、ラディスがその場に座り込んだ。私は彼の胡坐に座るように降ろされる。
退屈だったのだろうかとおろおろしていると、「気にするな」と彼が私の頭を撫でた。それでもおろおろすると、「大丈夫、ラディ

ス様も休憩したかったのだろうさ」と、グランツが言った。ガレリオも同意するので、少々心配になりながらも、お言葉に甘えることにした。
≪ああ、そういえば、貴女のお名前は？≫
二頭に同時に聞かれ、どれだけ抜けているのだろう、と思ったが、名乗らなかった私も対外抜けていたのだと気付かされてしまった。

≪お前さん、ラディス様が獣好きだって知っているかい？≫
唐突にグランツが言った。
≪え、でも、さっき・・・シエスシエラの前ではそんな感じはしませんでしたけど≫
≪なんでも、人間の前では表情を崩さないようにしているそうだよ≫
≪だからそっけなくなってしまったのかもしれんなぁ≫
私はうつらうつらとしてきたラディスを気にしながら彼らの話を聞いていた。そういえば、人に対して微笑みかけたところは見たことがない。
≪子供の頃なんかは、暇さえあれば僕らのところに遊びに来ていたんだよ≫
≪暇でなくても来ていた様で、時たま叱られていたなぁ≫
グランツが目を細める。ガレリオも笑っていた。
≪近頃は政務が忙しいらしくて、あまり来ていなかったんだが・・・元気そうでなによりだ≫
≪それにソラが近くにいるのなら、わざわざここまで足を運ばなくてもいいみたいだしね≫
私はラディスを見上げた。気付いた彼が微笑んでくれる。
どうやら、動物セラピーは彼に対して十二分の威力を発揮できるらしい。これはいいことを聞いた。
しかし肝心の彼はもうそろそろこのまま寝てしまいそうだ。

≪あの、またお話をしに来てもいいですか？≫
≪ああ、いつでもおいで≫
≪どうせ僕らも暇なんだ≫
それを聞いて礼を言うと、ラディスを起こして来た道を戻った。
陽はもう西に傾いてきている。

部屋に入って始めに目に入ったのは、高く積まれた書類だった。午前中を丸々と、午後の日が出ている時間の半分を使ってしまったのだ。このくらいは当たり前だろうか。
ラディスはため息をつかないまでも、一度前髪を掻き揚げ、おとなしく机へと向かった。これはまた夜遅くまで掛かってしまうかもしれない。
私もため息を吐きたくなったが、彼がしなかったものを私がするわけにもいかず、それを飲み込んだ。

ラディスが仕事を始めて数時間も経たぬうちに、廊下を騒がしく駆ける足音が聞こえた。その足音がこの部屋まで近づいてくる。ラディスはこの時ようやくため息を吐いた。
足音は部屋の前で止まったかと思うと、間もおかずに勢いよく扉が開かれた。
「兄上！！ただいま戻りましたぶほぁっ！！」
声に驚いて扉のほうを見ると、顔面に紙束を貼り付けた状態でのけぞる青年が居た。何なのかとラディスを見ると、座ったまま何かを投げたような体制をしていた。
「お前はいつになったら行儀を覚えるんだ・・・」
あの紙束を投げたのはラディスらしい。
ていうかそれ、仕事の書類じゃないの？

その７（後書き）

気が付けばｐｔ２０００越え、お気に入り登録数５００件を越えていました！！
ありがとうございます！！
更新はかなり遅いですが、お付き合いいただけるとうれしいです！！

その8

書類を顔面キャッチしてしまった彼は、多少仰け反ったもののすぐに体制を建て直し、未だ顔に張り付いている書類をはがした。
それから姿勢をただし、「申し訳ありません、兄上！」と、きっちり９０度のお辞儀をした。
「仕事が達成できた喜びに興奮してしまい、礼を欠いておりました。今後はこのようなことがないようにいたします」
「その台詞も何度目だ、まったく」
額に手を当てながら、ラディスは嘆息する。
「うわぁぁ、ごめんなさい兄上、今度こそはしっかりやりますから」
「お前の今度は当てにならん」
「兄上ぇぇぇ」
その人は泣きそうに顔を歪めながら、机に両手をついてラディスに迫る。ラディスはそんな彼を無視して仕事を再開した。
まるで親に叱られた子供を見るようだ。兄上とか言ってるから兄弟なんだろうけど。
ラディスは短く息を吐くと、顔を上げて彼を見た。
「ディック。それよりも、報告書はどうした。手ぶらのように見えるが」
言われ、ディックと呼ばれた彼ははっとして自分の両手を見た。が、その手には何も持っていない。
彼は青ざめてあわあわと口を開閉した。
「ご、ごめんなさい兄上！あぁぁ、たぶん車の中だ。せっかく一生懸命書いたのに！！」
車？この世界には車が存在しているのだろうか。
首をかしげて聞いていたが、どうも私が想像した車とは違うことがすぐにわかった。

「そうだ兄上、あの車はひどいです！積荷の代わりに人が乗る、なんて、大勢の移動の時には便利かと思いましたが、揺れはひどいしあちこち痛いしで、これならおとなしくシエスシエラに乗ったほうがましです！」

「それは後で聞くから、さっさと報告書を取りに行け」

ラディスは熱弁を振るい始めたディックを一蹴し、手をひらひらと振って追い出す動作をする。ディックは「そうでした！」と言って踵を返した。その背中に

「走らず、歩いて行けよ」

とラディスが念を押し、彼も「はい！」とかなりいい返事をした。が、よかったのは返事だけのようで、閉まった扉の向こうからはバタバタと駆ける音が聞こえた。

ラディスは再び嘆息。お疲れ様です。

足元まで寄っていくと、彼は私に気が付いたのか軽く微笑んで私を膝の上に乗せた。

「騒がしかっただろ。悪かったな」

言いながら私の頭から背中までを撫でる。いえいえ聞いている私にしたら、軽いギャグを見ている気分でした。

数回撫でた後、満足したのか彼は私を膝に乗せたまま仕事を再開した。

あれ、このままでいいの？ていうか、降りるときの振動で手ぶれとか起きそうで、降りるに降りれないんですけど。

結局私はしばらくそのまま過ごす事になった。

まどろみ始めた時、再び廊下がバタバタと音を立てた。どうやらディックは、懲りずに廊下を走っているらしい。

その足音がドアの前で止み、一呼吸おいてからノックの音が鳴った。

「兄上、ディックです！」

「・・・・・・どうぞ」
「失礼しまぶふぉ！！」
彼はまたしても、顔面で書類をキャッチする羽目になった。
ノックをしただけ、進歩はしたのかもしれない。
「反省点は」
「えぇ？えーっと・・・ノックはしました！」
顔から書類をはがしながらディックは言う。
「そうだな。そこは褒めてやろう。だが俺は「走るな」と言ったはずだが」
言われて、彼ははっとして青ざめた。またしてもきれいなお辞儀を見てしまったよ。
「うぅ・・・。こちら、今回の報告書です」
「・・・よし。お前は部屋に戻って礼儀作法の勉強でもしていろ」
「えぇ！？もうちょっといてもいいじゃないですか！」
眉毛をハの字にして机に両手をつくディック。そんな彼を無視して、ラディスは報告書を読み始めた。
今にも泣き出しそうな彼を哀れに思いながら見つめていると、彼も私の存在に気がついたらしい。ばっちりと目が合った。
「兄上、新しい獣を買ったのですか。よく見つけましたね、こんな小さいの」
言いながらも私から視線をはずさず、まじまじと見てくる。
そんなにじっくり見られると、恥ずかしいのですが・・・。
私は思わず身じろぎし、ラディスの方に寄った。それにあわせるようにディックも乗り出してくる。そのときにバサバサバサッ・・・と、紙の束が落ちる音がした。
「・・・ディック」
はっとしてももう遅い。紙の束が落ちる音――――机の上の書類が、無残にも床に散らばったのである。
ラディスの低い声に呼ばれた彼がそろそろと顔を上げると、酷く冷めた目で自分を見ているラディスがいた。

「お前は本当、礼儀も行儀もなっていないな・・・。ソラの方がまだ理解しているぞ」
なんか例に挙げられてしまった。恐怖と疑問符で顔を埋めた彼のために、「ごめんなさいソラって私です」と、机に両前足と頭を乗せる。
その私の頭をラディスが撫でたことで理解したのか、「僕はこの獣以下ですか・・・」と俯いてしまった。
そしてしょんぼりしたまま落ちた書類を集め始める。ラディスもため息を吐くと、私を降ろして自分も書類を集め始めた。
私も手伝えればなぁ、と思いながら二人を見つめる。私は薄い紙を掴めるような手を持っていない。
もどかしさになんとも言えない気分になっていると、突然扉が大きな音を立てて開いた。
「ラディス兄様！！ただいま戻りましたー！・・・って、何してるんです？」
入ってきたその人は、しゃがみ込んでいる彼らを見て首を傾げた。
「ライツ・・・お前はノックを覚えろ」
ラディスは額に手を当て、本日何度目かのため息を吐いた。ため息の多い日ですね。お疲れ様です。

「あはは、ディック兄様は相変わらずば・・・ええと、元気ですね！」
ライツと呼ばれた、どうやら三男らしい彼は、机に最後の紙束を置きながら言った。何か言いかけたが、聞かなかったことにしよう。
「ラディス兄様、こちらはアスティニアとジェニスの報告書です」
「ああ、ありがとう」
ラディスはライツから報告書を受け取ると、椅子に座ってそれを読み始めた。ディックの報告書は既に読み終わっていたらしい。
毎度思うが、読むの速いなぁ。速読でも習得しているんだろうか。

ライツはそんな彼の様子をじっと見ていた。そしてディックは、なぜか私の真横で座り込んで私を見ていた。
何だろう。変なプレッシャーがかかって彼のほうを向けないぞ。
この視線から逃げれないかと移動してみたが、そうすればディックは四つんばいで付いてくる。いやいやいや、王子のする行動ではないだろそれ。
「・・・ディック」
「はい！」
ラディスに呼ばれ、彼は座ったまま姿勢を正した。気づけばラディスはこちらを見ていて、ライツも・・・あの・・・うん、「なにしてんのあいつ」みたいな蔑んだ目で見ている。
弟が兄に向ける目ではないと思う。
「さっきから何をしているんだ、お前」
「はい！この、ソラの生態が気になりまして、少々観察をしておりました！」
いつの間にか私は観察対象にされていたらしい。ディックは白衣三人衆みたいな研究家気質なのだろうか。
「そうか。では、お前はゴードンフィリアに自分と同じ歩き方で追い掛け回されたいか？」
「え」
ゴードンフィリアが何かわからない私は首を捻ったが、ディックは少し考えた後に青ざめて身震いした。ライツも顔を引きつらせている。
「い、嫌です！あんな巨体が二足歩行で後ろを付いてくるなんて・・・何を考えているのか」
「では、今のお前の行動は？」
ディックはまたも考える。そしてはっとして、「申し訳ありませんでしたぁぁぁ！！」と、土下座をした。
洋装の人が土下座。この世界にその謝り方があったという意味も込めて驚いたが、その土下座の勢いに驚きすぎて後ずさってしまっ

た。

ラディスがため息をついたのは言うまでもない。

その８（後書き）

お気に入り件数が１０００件超えしていました！
皆様ありがとうございます！！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

途中に出てきた町の名前を変えさせていただきました。

その9

「一週間後にまた頼む。それまで休め」
ライツから受け取った報告書を読み終えたあと、ラディスは二人に言った。彼らも「はい」と返す。
そしてラディスが仕事に戻ろうと目線を下げると、「ラディス兄様」とライツが声をかけた。
「夕食はご一緒できますか？報告書に書くまではいたらないような話ですが、お話したい事がたくさんあるのです」
目をきらきらと輝かせながらライツが言う。その横に並んでいたディックも「ぜひ僕も」と自分を指している。
対してラディスは少し迷っているようだった。昨日の様子や朝食のことを考えると、彼の食は今かなり細いのかも知れない。それを、どう見ても自分を慕っている様な彼らに見せたくはないのかも。
しかしどのくらい離れていたのかはわからないが久しぶりに会ったんだから、夕食ぐらいは一緒がいいよなー、と、関係ないのに考え込んでしまった。
そしてはっと思う。ラディスが彼らと夕食を食べるとしたら、私はどうしよう。
兄弟水入らずに割って入りたくはない。
部屋で待機していれば誰か持ってきてくれるか？いや、そんな迷惑かけるのもなぁ。
一晩くらい食べなくても平気かも。朝には食べられるしね！よしそうしよう！
と、自己完結していたら、ラディスにひょいと抱き上げられた。膝の上に乗ったかと思うと、緩く抱きしめられる。
「・・・今俺はあまり食べられないんだが、それでもいいか？」
ラディスが二人を見て言う。ライツはその言葉に一瞬目を見開いたが、ディックは満面の笑みで「はい！」と応えた。ラディスは応

えのないライツを見る。
「・・・もちろんです。お話したくてお誘いしているのですから。食事は二の次です」
にっこり笑顔で、彼も応えた。
では後ほど、なんて言いながら、ライツが部屋を出て行こうとする。が、ディックは出て行く気配がない。その首根っこをライツが掴み、引きずるようにして部屋を出て行った。
それを座ったまま見送ったラディスは、今度こそ私を抱きしめ、耳元で何か言う。
「お前も付いて来てくれよ」
・・・え。

いや、付いて行く気なんかなかったんだよ、本当に。
兄弟水入らずに居るとかさ、例え向こうが私を視認できないとか、気にしないとか、そうであったとしても私が気になっちゃうんだよね。
でもさ、「ご夕食の準備が整いました」って迎えに来たリズさんが言った途端、ラディスが私を捕まえにかかるとか思わないじゃないか。あれから座りっぱなしで詰まれた紙束半分くらい処理し終えた人とは思えない動きだった。行動の先読まれるとか予想外だ。
しかも私が嫌がって暴れたら、「嫌なのか」って、若干悲しそうなんだよ。いや、表情は大した差はないんだろうけど、目って本当口ほどに物を言う。
そんなことされたら、付いて行くしかないじゃないか。
そんなわけで、私は今彼らの食卓に混じっちゃっているのです。長いテーブルの端のほうに詰めて、兄弟三人でお話してます。いや、ラディスはほとんど聞き役なのだけど。たまに質問するくらいで。

私はそのラディスの足元でご飯を食べています。
三人は二等辺三角形の頂点みたいな位置に座っていて、私はラディスから見て右側、ディックの居るほうに居る。
ディックは大食漢らしく、さっきから食べる手が止まらない。のに声が聞こえる。どんな技を使っているのかとても気になる食べ方だ。
ラディスはやはりあまり食べられないらしく、手があまり動いていなかった。でもディックもライツも気にせず話しているようなので、ちょっと安心した。
私の分のご飯も食べ終わり、このままこっそり抜け出してもばれないかも、と思うほど会話は盛り上がっていた。笑い声も聞こえるので、相当盛り上がっているのだろう。
と言うわけで立ってみたのだが、壁際に控えていたリズさんに見つかってすごい視線をいただいてしまった。リズさんはあの追いかけっこもどきを見ているから、私が付いて来たのではなく連れてこられた事を知っている。だから見張っているのかもしれない。
それでなくても、食事中に獣にうろつかれるのは嫌なのかもしれない。うん、こっちのほうが濃厚だ。
うろついたら彼女に何をされるのか、と若干恐怖に陥った私は、仕方なくその場に伏せをして、彼らの会話が終わるのを待った。時々ラディスがこちらを見るので、脚に尻尾を絡ませて遊んでいた。猫のしっぽって本当に自在に動く。おもしろい。最初は驚いたラディスも慣れたらしく、その後反応を見せなくなった。

「それではラディス兄様、本日はありがとうございました」
「とても楽しかったです！またご一緒しましょう！」
「ああ」
ラディスを彼の部屋まで送った彼らは、ひとつ礼をすると踵を返して廊下を歩いていった。それをしばらく見ていたラディスも部屋

に入り、椅子に座ると息を吐いて一気に力を抜いた。
なんでそんなに力(りき)んでたんだろう。
傍に寄って見上げてみても、彼は私を抱き上げて撫でるばかりで何も言わない。ううむ、理由がまったくわからない。
ラディスは机の上にある紙束をちらりと見たが、今日はもうやる気にならないらしい。私を降ろすと、入ってきたのとは違う扉を開いて、隣の部屋へ入っていった。
何の部屋だろう、と扉の前で首を傾げる。扉は閉まっているので中の様子はわからないが、衣擦れの音と水音が何度も聞こえたので多分浴室だ。けれどラディスは割かし早めに出てきたので水浴び程度だと思う。いやしかし男性って入浴時間短いって聞いたしなぁ。
ラディスは濡れた頭をタオルで拭くと、それを椅子に掛けてベッドへ向かった。私もそれを追い、昨日の寝る時と同じ位置に行く。
寝間着に着替えたラディスはシーツの中にもぐりこむと、「おやすみ」と私に向かって言ってランプを消した。私も「にゃあ」と返して蹲る。
が、しばらくするとラディスが起き上がった。何事かと彼の方を見ると、彼も私の方を見ている。なんだなんだ、と思っているうちに彼は私を抱え、そして寝る体制に入った。
昨晩ラディスがうなされていた時に私が無理矢理した体制だ。なんだ、気に入ったのかこれ。
またしばらくすると、寝息が聞こえてきた。うなされている様子もない、安らかな寝息だ。それに安心して、私も目を瞑った。
ああ、なんかいろいろあった気がする。というか会った気がする。長い一日だったなぁー・・・。

あれ、これまだ二日目？

その１０

目を覚ますと、昨日と同じような状況だった。眠たげな目をしたラディスが私の体を撫でている。
昨夜は魘されなかったらしい。よかったよかった。
その後リズさんが来て、朝食を食べて、仕事を始めよう、とした時だった。
「ラディス様、陛下がお話があるそうです。寝室へいらっしゃるように、とのことです」
まるで図ったかのようにキーリスがやってきて、そう告げた。
ラディスは「わかった」と返事をすると、持っていたペンを置いた。そして足元にいた私を抱え上げると、きつく抱きしめた。

≪ということがあったんですけど、どういうことですかね≫
現在私はワイバーン達のところへ来ていた。ラディスが陛下――――まぁつまりラディスのお父さんの所へ行っている間、私は暇になるだろうと散歩の許可をもらった。
そうは言われてもあまりうろつくと迷子になりそうだし、知っているところで暇が潰せるのは話し相手のいるここぐらいかな、と。
ワイバーンであるグランツとガレリオは、私の話をふむふむと聞いている。
≪ラディス様は陛下に会いたくはないのかもしれんなぁ≫
グランツが言った。私は「え？」とグランツの方を向く。
≪お父さんですよね？なんで会いたくないんですか？≫
≪親子にもいろいろあってね～≫
ガレリオは呟くように言うと、少し目を細めた。グランツがその後を継ぐ。

≪ラディス様は、陛下に好かれていないんだよ≫
≪え？≫
私は更に混乱した。親とは、無条件で子供を愛するものだと思っていたからだ。
≪ラディス様はね、ディック様とライツ様とは母親が違うんだ。二人は正室の、つまり王妃の子。ラディス様は側室の子なんだよ≫
ガレリオはそう言って目を閉じた。
≪陛下って頭固くてさー、今時ほとんどが気にしない「血筋」ってのを気にしてるんだよ。国民も僕らも、ちゃんと統治してくれるなら血なんて関係ないのにさ≫
≪陛下は今床に伏していてな。とても政治を行えるような状態ではないんだよ。だから王位を子に渡そうとはしているらしいんだが、長男のラディス様ではなく、次男のディック様に渡そうとしているらしい≫
≪でもディック様もライツ様も反対するんだよね。正直僕もディック様に治められるのはちょっと不安≫
ガレリオは小さく笑うと、グランツも釣られたように小さく笑う。
≪だが、それが更に陛下の気を害したようでな。未だ王位は継がれず、ラディス様も嫌われる、と言うよりも、存在を否定される一方だ≫
そこでようやく、朝の行動の理由がわかった気がした。
ラディスは不安で、恐ろしくて、何かに縋りたかったのだ。
≪・・・もしかして、ラディス様ってディック様とライツ様のことも苦手なんですか？≫
昨日の夕食のことを思い出し、聞いてみた。ラディスは昨日も同じような行動をとっている。
グランツとガレリオは、どこか難しい顔をした。
≪そうさなぁ・・・。彼ら自身のことは好いていると思うよ。しかし、彼らの存在は少し不安になるのやもしれんなぁ≫
≪うん、僕もそう思う≫

彼らの言い方に、私は疑問符を浮かべた。いまいち良くわからない。
≪ええとね、ラディス様は陛下から「お前は王位を受け取る資格はない」みたいなことを言われているでしょ？子供のころからそう言われているラディス様はそれで納得しているんだけど、二人はちがうじゃない。それが自分のせいなんじゃないかーとか、彼らが反対するおかげで着々と陛下に嫌われるーとか、思ってるんじゃないかな≫
≪しかし、ラディス様はお二人の性格自体は好いているようだ。普通の兄弟であったなら、なんのわだかまりもなかったのだろうがなぁ≫
最後にグランツはしみじみと言った。
なんだかややこしいし、少し悲しくなった。
「普通の兄弟であったなら」。ディックとライツはそう接しているように見えたが、ラディスは違ったのだろうか。
二人は明らかにラディスを慕っている。ラディス自身もきっとわかっている。
なにを不安に思っているのだろう・・・。
≪そういえば、側室の方って・・・≫
グランツとガレリオに尋ねてみる。
≪亡くなられたよ。ラディス様が五歳の頃かなぁ≫
≪ついでに言うと、王妃様も亡くなってるんだよ。ライツ様が生まれてすぐ≫
≪そうですか・・・≫
私はそういうと、「今日は帰ります」と踵を返した。その背中に「またおいで」と声を掛けられたので、頭だけ振り返って礼をする。
なんだか暗い話を聞いてしまったなぁ・・・。
動物の姿って言うのはこういうときに便利かもしれない。表情はわかりにくい。その代わりに尻尾がそれを表していそうだけど、この世界の人にそういうことはわからないだろう。

中庭に近付いた頃、渡り廊下の向こうにディックを見つけた。何やら肩を怒らせながら早足で歩いている。その表情も怒りに満ちているようだった。
その後ろを慌てたような兵士が一人着いて行っている。あれ、ここにきて初めて兵士を見た。この城防衛は大丈夫なのだろうか。
兵士は腰に携えた剣とは別に、手に木刀を持っていた。ディックもなかなかに軽装である。
気になった私は彼らに着いて行く事にした。

着いた先には大勢の兵士がいた。中には兵士がつけている鎧よりも立派な装備をしている人もいる。あれが騎士というものだろうか。
彼らは一様に木刀を交えていたが、一人がディックを見つけ膝を付くと、周りもそれに気が付いて次々と膝を付く。
「ここにいるやつらで全員か？」
ディックは後ろに着いてきていた兵士に問う。
「はい、休憩中の兵士、騎士は全員おります」
兵士は恐々と答えると、木刀を差し出した。ディックはそれを受け取ると、膝を付いている彼らに向かって大声で叫んだ。
「全員、俺の憂さ晴らしに付き合え！！いいな！！」
バンッ、と木刀の先を地面に叩きつけるディック。私はその声に驚いて身を竦ませた。
兵士たちは驚くでもなく、むしろ心なしか喜んでいるように見える。何だろう、全員Mとかだったら嫌だな。
「最初！お前とお前、それからお前！」
ディックが三人の兵士を指して言うと、彼らは「はい！」と返事をして木刀を構えた。ディックも構えると、兵士の一人が仕掛ける。ディックは避けるでもなくそれを木刀で受けると、横に流して相手のバランスを崩した。
兵士の後ろから迫っていた残り二人の兵士が同時に攻めてくる。

それをディックは、方やかわし、方や木刀で受けて応戦した。
そんな攻撃を繰り返すうち、兵士の方が立ち上がらなくなった。荒く息を吐きながら地面に突っ伏している。
「次！そこに固まってるお前ら四人！」
指された兵士・騎士を混ぜた四人は「応っ！」と応えると特攻で仕掛けてきた。ディックはそれもかわし、受ける。
木刀同士がぶつかる音や、木刀が体に当たる音を聞きながら、私は呆然とその様子を見つめていた。
昨日書類を顔面キャッチした、机から書類を落とした人とは思えないほどキビキビと動いている。一対多数だというのに、未だ攻撃を受けたような様子はなかった。
それらを見る事に集中していた私は、後ろに人がいることに気が付かなかった。突然後ろから抱き上げられ、驚いて尻尾をぴんと伸ばす。
くるんと体を反転されて見えたのは、ライツの顔だった。
「お前、ラディス兄様の獣だよな。名前は確か・・・ソラだ」
そう言って、彼は私をじっと見つめてくる。私は驚きが尾を引いているのか、緊張しているのか、尻尾を伸ばしたままだった。

その頃（前書き）

今回はラディス視点です。
読まなくても支障はありません。ないはずです。

その頃

ディックとライツがそろって帰ってきたことから、すぐに呼ばれるだろうとは思っていた。

二人には俺の仕事を手伝ってもらっている。俺の力量では届けられる資料をこなしていくだけで手一杯で、国内の町村の視察までできない。

キーリスには「必要ない」と言われたが、実際に見ないと世の中のことなどわかるはずもない。それでわかったなど、井の中の蛙だ。

どうにか時間を作ろうと苦心していた時、二人が「手伝わせてください」と、必死な顔で申請してきた。

最初に聞いたときは何を言っているのかと困惑したが、流してみても連日申請に来た。

仕方なく、近場の町の視察を頼んだ。条件として、見たこと、聞いたこと、感じたことを一言一句違わず報告するように、と言って。

一週間後に提出された二人の報告書は、俺が思っていたものより上等だった。普段惚けた行動ばかりするディックでさえ、想定以上に事細かく書いた報告書を提出したのだ。

実際そのおかげで浮き彫りになった問題もあった。それの対策案を決定すると、また二人が手伝いを申し出てきた。そして、それも予想以上の成果を出して帰ってきた。

それから二人にはよく手伝ってもらうようになり、いつしかそれが当たり前になっていた。

彼らの報告書を見るたび思う。

やはり、王位は彼らが継ぐべきなのだと。

父上の寝室が見えてきた頃、同じく寝室に向かっていた二人に会った。嬉しそうに駆けて来る彼らに苦笑したが、彼らの後ろに控えていた騎士たちも困った用にこちらを見ていた。

「ラディス兄様、今日こそは父上を納得させてみせますからね！」

なにやら意気込んでいるライツ。ディックも同意して頷いていた。
俺は何も言えず、ただ彼らを見た。
この話し合いも、この会話も、もう何度目だろう。
扉の前に立ち、その両脇に控えていた兵士が扉を開いたのと同時に足を踏み入れた。

部屋の中央に天蓋の付いた大きなベッドが置かれている。そこに、上体を起こした父上が居た。
中に居たメイドたちがベッドの近くに椅子を用意する。それに三人とも座り、父上がゆっくりと顔をこちらに向けた。
「何を話すかは、わかっているな？」
だるそうな低い声が言う。目元も少々窪んでいて、それほどの年でもないのに髪は白く、顔には少々皺があった。
父上は病気だった。人にうつりはしないが、今この世界に治す術は存在していない。
俺は彼の顔をきちんと見ることができなかった。視線を中心からずらしてしまう。
けれど、父上はきっと俺のそんな様子に気が付いてはいない。彼の目にはいつも、ディックとライツしか映っていないのだから。
「はい、承知しています」
俺が声を発しても、彼の目はこちらを向かない。わかってはいるのだが、やはり少し悲しくなる。
ディックたちは、その父上の態度が気に食わないらしい。入った当初から、彼らの眉間には皺が刻まれていた。
ライツは一度深呼吸をしてその皺を消した。ディックは未だ消すことができずに居るが、ライツに背中を叩かれたことで我に返り無理矢理戻していた。
「・・・我々も承知しています。ですが、答えは変わりませんよ」
ディックが父上を見据えながら言う。膝に乗せられた手には力が

入っていた。
ディックの返答を聞いた父上はかっと顔を赤らめ「まだ言うか！」と怒鳴った。と同時に、苦しそうに咳き込む。俺は咄嗟に手を伸ばそうとしたが、慌てて引っ込めた。
「王位を継ぐのはお前だ、ディック。その補佐をライツがする。どうして納得しない！」
ようやく落ち着いた父上が吼える。ディックは父上を睨み、吼え返した。
「だから、嫌だと言っているでしょう！私たちの中で一番統治力に長けているのは兄上です！」
「あれには王位を継ぐ権利はない！あんな半端物」
「父上こそ、まだ言いますか！民が求めているのは血筋ではなく統治力です！どこからそんなこの国ができる以前の常識を持ってきたんですか！！」
二人は暫く睨み合い、父上が口を開こうとして再び咽た。横に控えていた侍従が背をさする。
「父上、よろしいでしょうか」
父上が落ち着いた頃を見計らって、ライツが父上を見つめながら口を開く。その瞳はどこか冷たく感じた。
「先ほど父上は「半端者」と仰いましたが、私はこれを侮辱と取りました。大変腹立たしく思います。謝罪してください」
ライツの冷え冷えとした視線と言葉に、父上は一瞬瞠目した。彼の言い方は目上に対するものではない。
見ればディックも怒りがありありとわかる視線を父上に送っていた。
「な、何を言っている？あれはお前たちに向けた言葉では」
「ええわかっています。ですから、謝罪してくださいと申し上げているのです」
「だから、何故私がそんな」
「父上」

ライツは悉く父上の言葉を遮り、瞳をより一層冷やしていく。
「貴方は、母上を放っておいて夜な夜な遊び歩いたご自分を棚に上げるおつもりですか？」
空気が凍った気がした。その中で、父上の顔だけが見る見る赤くなっていく。
「何たる侮辱か・・・！お前、私を誰だとっ・・・げほげほっ」
父上が今までよりも酷く咳き込む。壁に寄っていた医者もベッドに寄ってきたから、今日はこれでお開きだろう。
俺が立ち上がると、ディックとライツも倣うように立ち上がった。俺は父上を一瞥し、扉へ向かう。その後ろでライツが父上に向かって言った。
「貴方が誰か？そんなのわかりきってます。寝てばかりで政務のひとつもこなさず、口ばかりは出してくる。貴方は国王でもなんでもない、ただの頑固でうるさい父です」
俺はその様子を耳だけで聞いていた。出る瞬間、父上の苦しげな呻きが聞こえた。

「申し訳ありませんでした！」
俺の自室へ戻るなり、付いてきたライツが勢い良く頭を下げた。
ディックは父上の寝室を出てすぐ「僕はこれで失礼します」と行ってしまった。向かった先が兵の宿舎だったので、訓練と証した憂さ晴らしだろう。いつものことだ。
「何がだ？」
執務机に詰まれた資料を手に取り仕事をする。昨日の分も残っているので、いつもより急がなければならない。
応えがないのでライツを見れば、俯いて拳を握っていた。
「ラディス兄様に対し・・・大変失礼な物言いをしました・・・」
言われ、何のことだか考える。ライツが言った言葉で当てはまりそうなもの・・・とは、あれか。父上が遊び歩いていたという。

俺の母は元はただの町娘だったのだ。家は貧しく、本当に困ったときは体も売ったと言う。
母と父上はそうして出会ってしまい、俺ができた。子供ができてしまったことから、仕方なく側室にあげたらしい。
「気にするな。今更どうこうと気にすることでもない」
言ってみたが、ライツの様子は変わらない。が、暫くすると「僕も、本日は失礼させていただきます」と、礼をして部屋を出て行った。
その背中を見送った後、手に持っている資料に視線を戻した。しかし、何度読み直してみてもまったく頭に入ってこない。
思わず部屋を見回すが、今現在この部屋には俺しか居なかった。
資料を机に放ると、椅子の背もたれに身を預け天を仰いだ。自然とため息が出る。両手で目元を覆った。
「あぁ・・・ソラに触れたい」
言って、はっとする。そして苦笑した。
ソラが来てから、まだ3日と経っていない。なのに、俺はもう依存しているようだ。
自分自身に呆れたが、それでも気持ちは治まらなかった。
あの短くも滑らかな毛が、自由に動く尻尾が、可愛らしい鳴き声が、透き通った瞳が、そして、纏っている雰囲気が、
ひどくいとおしく、安心するものだったから。

その11

じいっと見つめてくるライツに対して、私は混乱して彼を見返した。が、すぐに逸らした。

正直にらめっこは得意ではない。笑ってしまう以前に、見つめていられなくて顔を逸らしてしまうのだ。

逸らしたことで更に焦りを増幅させた。未だライツは動かない。

何だろう。何か気に障ることでもしてしまったんだろうか。やはり昨夜の夕食は行くべきではなかったんだろうか。

考えてみても、彼の目に映った記憶が大してない。思考はすぐに底をついた。

やがて彼は小さく呻くと、私を自分の膝の上に降ろして大きなため息を吐いた。

「なんで僕らじゃだめなのかなぁ」

ライツは言いながら私の耳を軽く引っ張る。その手を軽く叩けば、今度は私の手（前足）をいじりだす。

「なんでお前には笑顔を向けるんだろう。獣がお好きだからかなぁ。でも、今までは僕らがいたら笑っては下さらなかったんだけどなぁ」

ライツがぶつぶつと繰り返しているのは、ラディスのことだろうか。私の知っている人で動物好きは彼しかいない。

ぶつぶつと言う声がはたと止む。ライツはじっと私の手を見ていて、その指は肉球を触っている。

「そうか、これだな？ラディス兄上はこれをお気に召したのだな？」

無きにしも非ず。思わずふっ、と息を漏らしそうになった。わかったということは、きっと彼もこの感触を気に入ったんだろうなぁ。

しかし真顔でじっと見られるのはひどく居心地が悪い。そのくせ見て触っているのは肉球なのだから、端から見たら間抜けな構図だ

と思う。
「なんだライツ、獣虐待中か？」
そう頭上から声を落としたのはディックだった。ライツは勢い良く顔を上げる。
「ディック兄様、それは冗談にもなりません！」
「はは、悪い悪い。けどお前、端から見たらかなり変な奴だったぞ？」
ライツはぐっ、と詰まると、私の手を下ろさせた。ディックはそんな光景を見て声を出して笑い、ライツの隣に腰掛けた。
「それよりも、ディック兄様は気がお済になられたのですか」
「うー・・・ん、まぁまぁかな」
ライツが心なしか目を鋭くしてディックに問うと、彼は顎に手を当てて先ほどまでいた広場を見た。釣られてそこに目線を向けると、兵士や騎士たちがそれぞれ荒い息を吐きながら寝転んだり座り込んだりしている。
「気が済む前に、相手が尽きちゃってさ。お前は剣より策略だもんなー」
ディックがライツに視線を戻して言うと、「僕は相手しませんからね」とライツがそっぽを向いた。
ざっと数えても４，５０人はいたはずだが、ディックはそれをすべてのしてしまったらしい。一対複数で打ち合いをしていたはずなのだが、ディックの身体に汚れや傷は見当たらないし、息も切らしていない。うっすらと汗が浮かんでいる程度だ。
「あーあ、まったく。前やった時と大して変わってないし。いくら戦争はありえないからって、こんな体力なくて城守れんのかねー」
「未だ賊が現れていないのが幸いですね」
彼らの言葉に、倒れている兵士と騎士の何人かが反応する。座り込んでいる人たちは更に顔を俯かせた。さすがにちょっと哀れに思えてくる。
「うぁー、兄上と打ち合いたいぃ～」

ディックは子供のように脚を上下にバタつかせた。
「そういえば暫く見ていませんね、ラディス兄様が剣を振るところ」
「懸命に政務をこなしていらっしゃるから、体力が落ちておられると思うんだ。今なら右手でお相手してくださると思う」
「ラディス兄様を舐めないでください。そんなことしたらまた瞬殺されますよ」
「そんな気は確かにする・・・。一度くらい勝ってみたいなぁ」
ディックは天を仰いだ。ライツは「精々がんばってください」と言葉を投げる。
二人の会話から考えるに、ラディスはディックより強いらしい。あれだけの人数と打ち合っても平気な顔をしているディックよりも強いとなると、何を例えに出せばいいのやら。
政務もきちんとこなしているらしいし、ラディスは文武両道という奴なのだろうか。
私は暗記ができなかったんだよなー、とライツの膝の上で伏せをしながら耽(ふけ)っていると、ディックが一気に姿勢を戻した。ちょうど視界に入っていたものだから、驚いて思いっきり身体を跳ねさせた。
「俺たちって今、休暇をいただいているんだよな」
ディックはライツのほうを真剣な目で見る。彼は「今更なんですか」と息をついた。
「兄上はいつお休みになっておられるんだ？」
「本当に今更ですね」
ライツは今度は大きく息をついて、半眼でディックを見やる。
「僕がそれを考えないと思いましたか？以前使用人に聞いて回りましたが、リズあたりが休養を薦めたところ、政務を始めてまだ長くないからなかなか暇を作れない、と、ご自分で仰ったそうです。」
ディックはそれを聞いて「そうか」と俯いた。ライツもどこともなく視線を投げる。
「もう少し俺たちを頼って欲しいもんだな」

「ラディス兄様はお優しい方だから、僕たちに負担をかけたくないのでしょう」
なんだか空気がずんと重くなった。
でも確かにそうだ。あんな山のような書類、なんでラディス一人で処理してるんだろう。政務ってそういうものだろうか。あれじゃあ休憩の取りようも――――・・・
はっとして空を見上げた。太陽はもう真上にある。
ラディスにお昼休みを取らせよう計画が！と、慌ててライツの膝の上から降りる。走り出そうとして、どう行けばラディスの部屋に着くのか、と周囲を見回した。近道などわかるはずもなく、仕方なく来た道を戻ることにした。
後方から自分を呼ぶ二人の声が聞こえたけれど、私が居てもいなくても二人の会話は成り立っていたのでよしとしよう。

部屋の前に着いて、私はうなだれていた。
扉が開けられない。身長も足りなければ、ノックする手もない。
試しに、と前足で扉を叩いてみたが、ぱふ、と当たるだけで音が全く鳴らない。
これが本物の猫ならばどうするんだっけ？と考え、思いつきはした。が、こんな立派な扉を引っかく勇気は私にはない。
だって何やらうっすらと光沢があるじゃないか。傷ひとつないじゃないか。そんなところに傷を付けろと・・・？
仕方がないのでひたすら鳴くことにした。猫の鳴き声って小さいなぁ。としみじみ思いながら、外開きのこの扉が開いたときにぶつからない位置でお座りして、「開けてくださいな～」と鳴くこと三回。ゆっくりと扉が開いて、ラディスが顔を出した。
「ああ、聞き間違いじゃなかったか」
数回あたりを見回して私を見つけると、彼は微笑んで私を抱き上

げた。
たった三回で気が付くとは露ほども思っていなかったので、正直今かなり驚いている。水が欲しくなるほど鳴く覚悟をしていたのだが、それが無駄になってしまった。
けれど反面、嬉しくもある。彼の中では私が色濃く存在しているのだと思って、犬のように尻尾を振って頭を摺り寄せた。
ラディスは私の背中を撫でながら椅子に座る。ペンを取る様子はないので、しばらくこうしていれば少しは休憩になるのかな、と頭を摺り寄せ続けた。

その１２

今日は午後から謁見がある。と、朝食を食べ終わったちょうどその時にキーリスが言いに来た。どこかに監視カメラがあるのでは、と思ったことは秘密である。

キーリスはそれを伝えると直ぐに部屋を出て行った。彼と入れ違いにいつも両手いっぱいの紙束を持ってくる青年が入ってくる。

書類を持ってくるのは高確率でこの青年だ。そういう役職でもあるのだろうか。

今日も紙束を抱えてきた青年は、それを執務机に置くと一礼した。その際に私と目が合い、微笑まれる。私は２、３回尻尾を振って返事を返した。

彼は私を見ると大体微笑む。ラディスが笑っているともっと深く笑む。

最近では、彼もディックやライツのようにラディス大好きな人なのだと思うようになった。

彼が出て行った後、ラディスの足元に寄って行って座る。今日はどうしていようか、なんて考えていたら、ラディスが私を抱き上げて膝の上に乗せた。

彼はそのまま仕事を始めようとしたが、私にしたら冗談ではない。この体勢、以外と神経を使う。私が動いたことでペンがずれてしまったらと考えると、もう・・・！

と言うことで慌てて降りたのだが、再びラディスに捕まり膝の上に戻された。

今日はどうしたんだこの人。

仕方がないので机の上に移動する。広いこの机上で、ちょうどよさそうなスペースを見つけてそこに座り込んだ。

ラディスはそれを見て少し考え込んだようだが、「まぁいいか」と私の頭を撫でて仕事を始めた。

彼の仕事がどんなものか、直に見るのは初めてだ。ペンを走らせている書類をじっと見てみたが、いかんせん私の知っている字とまったく違う。
ミミズが這っている。いや、これは筆記体という奴か？習ってないぞそれは。教科書に載ってはいたけれど、流し見た程度だからあまり覚えていない。
睨むようにそれを見ていたが、処理し終えたのかその書類は別の山へと乗せられた。
次の書類は計算ものらしい。うねうねと書かれた字の横に数字が並んでいた。これは私の知っているものだった。
ラディスはもう一枚とって、表に数字を埋めていく。先にとった書類に書いてある数字ではないので、計算か何かしているらしい。
それにしてもさらさら書きすぎだ。本当に考えてるのかこの人。
ラディスはペンを止めると、思案顔になった。そして表の一番最後の欄を空欄にしたまま別に山を築いた。
何故あそこは何も書かないのだろう。疑問に思いながら、淡々と続けられる仕事を眺めていた。

ラディスが手紙のようなものを書き始めた時、ノックが鳴った。彼が返事をすると「失礼します！」と意気揚々とディックが入ってきた。
「兄上！ぜひ仕事のお手伝いを・・・」
「お前今は授業があるのではなかったか」
ラディスが呆れ顔でディックの言葉を遮りつつ言うと、彼は思いっきり顔を背けた。それをラディスがじっと見つめる。耐え切れなくなったのか、ディックは顔を俯かせつつラディスの方を向いた。
「・・・何か、兄上のお役に立ちたくて・・・抜け出してきました」
ぼそぼそと呟く。それでもラディスは聞き取れたらしく、息をひとつ吐いた。

「後で先生に叱られるぞ」
ディックがうっ、と顔を顰(しか)めた。が、直ぐに立ち直り顔を上げる。
「平気です！」
ディックのその表情を見て、ラディスはなにやら考え込んだ。ディックはそれを不安げに見つめる。
やがてラディスが顔を上げた。
「では、役立ってもらうために数学を勉強してもらおうか。近頃数字ばかりが来るんだ」
ディックは一瞬顔を輝かせたが、言葉を飲み込んだ後一気に暗くなった。まぁ、つまりは「勉強して来い」と言われているのだから当たり前か。
それでも諦めきれないのか、彼は俯いたまま沈黙する。その間もラディスは淡々と書類をこなしていった。
手紙らしき物も書き終わり、表は再び合計を空欄にしたまま新しい山へと積まれる。
「では兄上、こちらで勉強してもよろしいでしょうか！？」
がばりと顔を上げてディックが机に両手を叩きつけるようにしてついた。思わず驚いて飛び上がってしまい、ラディスに宥められた。
「俺は別に構わんが・・・勉強できるような机も椅子もないし、先生の承諾が必要だぞ？」
「椅子は運べばいいですし、机はさすがに運べませんが、なくても書き物はできます！先生の承諾は・・・何が何でも、とってみせます」
先生の～のあたりから後込みしていた。そこはあまり自信がないらしい。
しかし・・・と私はラディスの手元をちらりと見た。その手にはペンが握られている。
鮮やかな細工が施された「付けペン」だ。
・・・ディックはインクをどこに置くつもりなのだろう。
執務机は紙束でいっぱいだし、私がどけばスペースはできるだろ

うが、そんなことをしたらまた膝の上に行くことになりそうで嫌だ。
ラディスもそこを疑問に思ったのか、握りこぶしを作るディックに声をかけようとした。しかし彼は声をかけられる前に「では、説得してきます！」と、意気揚々と部屋から出て行った。
そんな彼をそのまま見送ってしまったラディスは、頭に手を当てて部屋を見回した。
「・・・あれに乗せれば何とかなるか・・・」
ラディスの視線の先にあるのは、ベッドに寄り添うように置かれた小さなテーブル。確かに、インクを置くくらいなら別に問題はないだろう。

「許可をいただきましたよ兄上！・・・まぁ、代わりに宿題を倍出されましたが」
ディックが勢いよく扉を開けて、朗々とした声と共に入ってきた。後半はほぼ呟いていたが。
ラディスは書き終わった書類をいつもの山に積んで顔を上げた。そして少し目を大きくする。
「・・・増えてるな」
「・・・やはり、お邪魔だったでしょうか」
ディックの後ろにはライツが居た。その手には数冊の本と筆記具が抱えられている。
「いや、お前まで授業を抜け出してきたことが意外だっただけだ」
ラディスが言うと、ライツは一歩踏み出して弁明した。
「ラディス兄様、僕は今日の分の授業は終わらせてきました！これは宿題と予習分です！」
「・・・そうか、お前は頑張るな」
ライツの勢いに押されながらも、ラディスはそう返した。うっすらと笑っている気がする。
ライツもそれに気が付いたのか、言葉が嬉しかったのか、うっす

らと頬を染めて笑んだ。
ディックを見やると、思いっきり視線を逸らしていた。身体動かす方が好きみたいだからなぁ。

そんなこんなで、二人は椅子を持ち込んでベッド側で勉強を始めた。私は位置も変わらず、机の上でラディスの仕事を眺めている。
やがて、ディックが本を見つめて難しい顔をしながらこちらへやってきた。
「兄上、質問してもよろしいでしょうか・・・」
「なんだ？」
ラディスが顔を上げて問い返すと、ディックは持っていた本を彼に見せた。私も書類やらを踏まないように近付き、それを覗き込んだ。
どうやら数学の教科書らしく、数字が並んでいた。
数学・・・数学？
ラディスが説明を始める横で、私は再度それを見つめる。並んでいる数字は分数になっている。それが記号を挟んで二つ並んでいる。
・・・分数の掛け算割り算だー・・・。
ディックはどう見ても十代後半から二十代前半である。
あれ、この世界の数学はこのレベルなんだろうか。と言うことは、ラディスが先ほどまでしていた計算もこんなに単純なものだったのか？
驚愕に首をかしげていると、説明を受け終わったらしいディックと入れ替わりにライツが本を持ってやってきた。同じようにラディスに質問し、本を見せた。それを覗き込む。
そこにはxやらyやら√やら、とにかくアルファベットや記号がたくさん書いてあり、式も長い。
数学のレベルは私の世界と大差ないようだ。
ディック・・・どれだけ勉強しなかったのか。
私は呆然と式を見つめていた。

その１３

ラディスが謁見に行ってしまったので、私は外出の許可をもらって（と言っても部屋から出してもらっただけだけれど）、ワイバーンたちのところへ来た。暇になったらここに来る様な習慣がつきそうだ。

他愛もない会話をして、ふと思い出して聞いてみた。

≪そういえば、戦争があり得ないってどうしてですか？≫

昨日ディックがこぼした事。日本のように戦争放棄でもしているんだろうか。

グランツがううむ、と唸る。ガレリオを見れば、グランツの方を見ていた。説明は任せると言うことなのだろ。

≪そうさなぁ、ならまずは、この国の歴史を話そうか≫

この国ができて１５０年ほど経ち、周辺国も同じくらいの歴史を経ていた。それよりも１０年ほど前、人間の世界は滅亡しようとしていた。

グランツも人間が滅んで行く様を見ていたと言う。木々が無くなり、枯れていく土地。少なくなっていく食料を奪い合い、ある者は殺され、ある者は飢餓に苦しみながら死んだと言う。

自業自得と言えばそうなのだろう。人間が便利さだけを求めた代償だ。

そんな様子を見ながら、グランツを含めた大型の獣は自分たちの森を守り続けた。自分たちが自由に暮らせる、人間に侵されない土地を広く確保していた。

人間は次第にその土地に目をつけた。奪い取ろうと幾人もの人間が乗り込み、返り討ちにあっていた。

獣たちはその姿を、怒りでも憎しみでもなく、呆れと悲しみで見

ていた。
あるとき、一人の男が獣たちの前に現れた。その男は武器も何も持たず、ある要求をしてきた。
「この土地の一部を貸していただきたい」
もちろん始めは拒否した。しかし言葉が伝わらないながらも必死で訴え続ける男に次第にほだされた獣たちは、人語を話せる獣を呼んで条件を出した。
獣たちの生活を必要以上に脅かさないこと、森を殺さないこと、人間本位にならないこと。
男はその条件を飲んだ。それを受けて、獣たちは森の端のほんの一部を男に貸した。
条件など守れないだろう、と一部の獣は思っていたらしい。ところが男は、条件のために人間に厳しく当たった。
条件はルールとなり、破ったものには罰を与えた。
１０年ほど経つと、その土地には男を王とした国ができていた。そこに住む人間たちは、獣に大きな敬意を示していた。人間本位どころか動物本位の国になっていた。
更に時が経つと、緑の範囲も国の数も増えていた。どの国にも共通のルールがあった。
獣に敬意を払うこと。
そのルールは何年経っても破られることは無く、獣とも共存するようになっていった。

≪・・・それでな、戦争をしない理由だが≫
一息ついてグランツが続ける。
≪国々の間には森があるんだ。戦争をすればその森が戦場となり、侵されるだろう？獣たちにも迷惑がかかる。だから、どんなに相手国に敵意を持っても戦争はできないのだよ≫
私は呆気に取られていた。そんなこと、というのはあれかもしれ

ないが、それでもそんなことで戦争が起きないと言うことが驚きだった。
≪今じゃ獣を殴ったら死刑なんだよ≫
ガレリオの言葉に更に驚いた。行き過ぎた動物愛護ではないかそれは。
≪けれどなぁ、人間と暮らすようになってから、もともと臆病だった小さな獣たちが更に隠れるようになってしまってな。私もシエスシエラの子より小さい獣を見るのは百年ぶりくらいだな≫
それで私は珍しがられていたのか。
頭の中を整理しながら考える。昨日ライツが言っていた「獣虐待なんて冗談にもならない」と言うのは、本気で冗談でも言えない事だったらしい。
≪でも、獣の売り買いはいいんですか？≫
グランツを見て言うと、≪そんなことがあるのかい？≫と逆に質問で返された。
≪グランツさん、僕は売られてきたよ。確か生態を調べたいからって理由だったと思う。その後ラディス様が気に入ってくださったからここにいるんだけど≫
≪そうだったかの。私は自分でここへ来たからなぁ。しかし、愛玩目的だけの売買はないのではないか？≫
となると、と考える。ラディスは当然そのことを考えただろうし、愛玩目的で買った訳ではないだろう。いや、買うどころか保護目的だったのかも知れない。嫌がったら森にでも放したのかも。
この国のルールと彼の動物好きを考えると、あり得ないことでもないだろう。そんなことされたら生きていける自信がないけれど。
≪・・・あれ？グランツさんていくつですか？≫
ふと、先ほどの話から考えてみた。建国が約１５０年前、それより前には既に居たと言っている。
≪うん？どうだったかなぁ、四百・・・は過ぎているはずだよ≫
グランツは本当におじいちゃんだった。驚いてガレリオにも同じ

問いをすれば≪僕はまだ１２０くらいだよ≫と返ってくる。それでも十分じゃないのか。
≪知らないの？僕らの寿命は大体六百か七百くらいだよ≫
驚きっぱなしの私に、更なる爆弾が落とされた気分だった。

シエスシエラの小屋の前を通ると、ライツがアルファの首に抱きついていた。なにやらアルファはとても喜んでいるようだ。
≪うわぁライツ様だ！また来てくれたんだ！ねぇ今日こそ散歩に行こうよ、僕走りたい！！≫
アルファは足を踏み鳴らしながら顔をライツに摺り寄せる。身体の振動にあわせて尻尾が揺れていた。
ライツも笑みながら「よしよし」とアルファの首筋を撫でた。アルファは更に嬉しそうに鼻を鳴らす。
「随分興奮してるね。どうしたの？」
≪そりゃあ自分の主が来てくれたらね！嬉しくないわけないよ！≫
隣を見ると、じゃれあう一人と一頭を羨ましそうに見ているリグナスがいた。私はそっちのほうへと寄っていく。
≪あーいいなぁ・・・。ディック様今日は来ないのかなぁ≫
≪リグナスの主はディックなの？≫
問えば、彼は視線を私に向けて≪様付けろよ、様≫と顔を近づけてきた。角がちょっと恐い。
≪そうだよ、俺の主はディック様。ディック様は外出するのがお好きだったから、昔はよくあの方を乗せて走ってたんだ。今でも遠征の際は俺を使ってくれるんだけど、この前は何か新しい乗り物の実験とかで連れてってくれなくてさぁ・・・≫
ため息をつくように鼻が鳴る。そして再び、羨ましそうにライツ達を見た。
確かグランツとガレリオも王様とラディスが主だと言っていた。この世界では一人一頭パートナーが居るのだろうか。
けれどそう考えると、昨日いた兵士たちの動物が居ない。ここに

は三頭しか居ないし、ワイバーンはあの二頭だけだ。
≪シエスシエラってここの三頭しか居ないの？≫
≪いや、他にも居るよ≫
リグナスが視線をこちらに戻した。ライツたちは何か飼育係のような人と話し始めたようだ。リグナスもそれが気になったのかちらりとそちらを見たけれど、直ぐに戻して質問に答えてくれる。
≪ここに居るのは王家の方専用なんだよ。ワイバーンはさすがに居ないけど、シエスシエラなら山ほど居る≫
なるほど、彼らは特別扱いされていたらしい。と言うことは、とフィリシアを見る。
≪フィリシアさんも誰か主がいるんですか？≫
聞いた瞬間、リグナスが≪あっ≫と声をあげた。何かと視線を投げる前にフィリシアが応えた。
≪私の主は王妃様だったのよ。もう亡くなってしまったけれどね≫
どこか寂しそうに言う彼女に私は慌てて謝った。ちょっと考えればわかることだったかも知れない。きっと今一番羨ましく思っているのは彼女なんだろう。
アルファがライツに引かれて小屋を出て行く。その姿を、微笑ましそうに、羨ましそうに、彼女は見ていた。

その１４

綺麗に磨かれた廊下を見つめながら歩く。そこに映った猫は若干目を伏せているものの、いつもの様子と大差ない。
私がため息を吐けば、その猫も吐く。それを睨みつけつつ足を止めた。
自分の考えの足りなさに嫌気がさす。いつもそうなのだ。もう少し考えてから喋ればいいのに、と何度も何度も思うのに、思うだけで終わってしまう。
だから前の世界でも…

…あれ？

思考が止まった。そして必死になって考えた。
前の世界で…何だっけ？
考えても思い出せなかった。思い出そうとすると一瞬ぞっとして、そしてすぐに去る。
訳が分からなくなって、早くラディスの部屋に帰ろうと思って顔を上げた。
…ここ、どこでしょう。
お城の中は大体同じ造りをしている。違う物といえば、飾られている調度品だろう。
あたりを見回せば、見たことのない絵画があった。今まで見たものよりも大きい絵がいくつもある。
慌てて戻ろうと後ろを向いたが、知らない道が続くばかりだった。
…私、どうやってここまで来たの？
とにかく誰か知っている人がいないかと歩を進める。しばらく進んだ先に見えた二つの肖像画に、思わず目を奪われた。
そこには綺麗な若い女性が描かれていた。真っ黒な髪をまっすぐ

垂らし、真っ白な肌が栄える暗い色のドレスを着た女性は、微笑んでこちらを見ている。
その隣の肖像画にも女性が描かれていて、こちらも白い肌だが、金色の髪が波を打っている。それに合わせるように明るい色のドレスを着ていた。微笑んでいるはずなのにどこか悲しそうに見える。
その二人には会ったことがないはずなのに、なぜか見覚えがあった。懸命に考えると、今度は簡単に思い至った。
この二人はラディスたちに似ているんだ。黒髪の女性はラディスに、金髪の女性はディックとライツに似ている。ああでも、ディックは少ししか似ていなかも。
もしかして、三人の母親だろうか。
しかしそうだとすると、なぜラディスの母親の肖像画まであるのだろうか。ふつう側室の肖像画まで飾るものなのだろうか。
考えるが浮かぶのは疑問ばかりで、なかなか答えには至らない。首を傾げたところで、背後から激しく咳き込む声が聞こえた。
振り返るとそこにはやけに豪華な扉があった。それはわずかに開いていて、その隙間から中を覗き込んだ。
天蓋のある大きなベッド。白衣を着た人たちとメイドさん、それから男の人が忙しそうに走り、ベッドに寝ている人の世話をしているらしい。
また咳をする声が聞こえた。どうやら寝ているその人から聞こえるらしい。
メイドさんの一人が水の入ったコップを持つ。白衣の人に支えられながら上体を起こしたその人は、白髪のおじさんに見えた。
髪が真っ白な割には、顔にも手にも皺が少なかった。おじいさん、と呼ぶにはまだ若い。
じっと見ていると、咳き込んだせいか涙目になっているおじさんと目が合った。驚いて後退ると、おじさんが私を指さしながらメイドさんに何か言った。
これはさっさと帰った方がいいのだろうかと一歩一歩足を引いて

いると、おじさんに話しかけられていたメイドさんが私の方に寄ってきて扉を開いた。この人は見たことがある。一番最初にお風呂に入れてくれた人たちの中にいたメイドさんだ。
彼女なら私がラディスの飼い猫だってことも知っているだろうし、もしかしたら送ってくれるかもしれない。…と甘いことを考えてみたのだが、メイドさんは私を追い返すどころか抱き上げ、さっさと室内へと戻っていった。
狼狽する私にお構いなしにおじさんのもとまで行き、私を体ごとおじさんに向かせた。
「陛下、こちらがソラ様ですわ」
彼女のセリフを聞いて固まった。おじさんおじさんと言っていたが、彼はラディスのお父さんであり、この国の今の王様だったようだ。
メイドさんが固まったままの私をベッドに降ろすと、今度はおじさん――――もとい、陛下が私を抱き上げて自分のシーツが掛けてある膝の上に乗せた。
「これはまた、珍しいものを手に入れたな。このようなところにどうした？」
言いながら私の頭をなでる。恐る恐る顔を上げると、彼は微笑みながら私を見つめていた。
…あれ、この微笑み…ラディスと同じじゃないか？
思ったその瞬間に、陛下はまた咳き込んだ。私から顔を逸らして口元を手で覆い、体を折り曲げて蹲りながら咳を繰り返す。白衣を着た人が慌てて寄ってきて声をかけた。陛下は制すように片手をあげ、しばらくしてようやく顔を上げた。
あまりにも激しく咳き込むから、心配になって顔を覗き込む。すると彼は少し苦しげではあるけれど微笑んで、また私の頭を撫でた。
「すまないな、驚いたろう。今日は特にひどいのだ」
私は陛下をしばらく見つめ、撫でる手に頭を擦り付けた。すると彼は一瞬驚き、そして嬉しそうに私を抱き上げた。

「なるほど、これはいいな。…お前が傍にいれば、ラディスも苦労だけではなさそうだ」
陛下の物言いに驚き固まる。その間に彼は「さぁもう帰りなさい」と私をメイドさんに渡し、命じて廊下に出させた。
閉まった扉を見つめ、陛下の言葉を反芻する。
あの言い方は、あの言葉は、あの表情は。
まるで、子供を気に掛ける親のようだ。

その後、結局道がわからずにうろうろしていたら、ちょうどよくいつも紙束を抱えてくる青年とあった。彼に着いて行っていると、彼が唐突に振り返り「もしかして迷子だった？」と問われ、ひと声鳴いて返事をした。
今も書類を抱えている青年はしゃがみこんで私を見ると、
「そっか、それじゃあ一緒にラディス様の部屋に行こうか」
と、踵を返した。どうやら今までの道は違う道だったらしい。仕事の邪魔をしてしまったようで申し訳なく思いながらも、今度は道を見失わないように顔を上げた。

「どうした？何か取り忘れでもあったか？」
扉を開くと、青年を見たラディスがわずかに目を見開いて言った。ベッドの方ではまたディックが勉強をしに来ていた。
私は部屋の中に入ると、お礼代わりに青年にすり寄った。私と彼が一緒にいたことが不思議なのか、ラディスの頭にわかりやすく疑問符が浮いている。
「ソラ様が迷っていらしたようなので、ご案内いたしました」
青年がそう頭を下げる。
「そうか。悪かったなロウン、ありがとう」
「いいえ。それでは失礼します」
一礼する彼に、しっぽを二、三回振る。彼は私に微笑んでから部

屋を出た。
彼の名前はロウンというのか。と頭に入れながらラディスに寄っていく。彼は傍まで来た私を抱き上げて膝に乗せた。
「いつもなら迷わず帰ってくるというのに、何かあったのか？」
いやぁ、私がドジしただけですよね。
撫でられながらうなだれる。そしてあの、ベッドに寝たきりになっている王様を思い返した。
ラディスはあの人に嫌われていると思っているみたいだけれど、そんな風には見えなかった。会話をしたわけではないから確かなわけではないけれど。
また陛下の部屋に行ってみようかな、と考えたところで、ディックが教科書らしきものを持ってラディスのもとへやってきた。
それを合図とするように、ラディスは私を撫でていた手を止め、私が帰ってくる前にしていたであろう行動に戻った。

その15

失敗した。まさかあのまま膝の上にいることになるとは。だから仕事中あそこにいるのは気が張って大変なんだってば。

と、何度目かの後悔をしている今は深夜。相も変わらずラディスは私を抱えたまま寝ている。

私はと言えば、抱えられた格好のまま眠れずにいた。この世界に来たからか、猫になったからか、どうもなかなか寝付けない。

しばらくじっとしていればいつの間にか寝ているのだが、その間がどうも暇だ。

動き回ってはラディスを起こしてしまうし、どうしようかなぁ…と寝返りをうつ。うつぶせ状態になると、ちょうど顎がラディスの腕に乗った。

なんだかこれにも慣れてきたな…あれ、私順応性高すぎじゃないか？

ええと…今日で何日目？四日目？まだ一週間も経ってないじゃないか。

…なんだか自分自身が不安になってきた…。

これは慣れきってしまう前に何とかしなくては。と、ラディスを起こさないようにゆっくりと腕から抜け出す。この中腰みたいな体勢、結構つらいものがある。動物の狩の時ってこの格好が多いけど、よくやるなぁ。と思ってしまう。彼らは命がけなのだから、このくらいはどうってことないのだろうけど。

時間をかけてしっぽまで抜ききり、少し離れてようやく伸びをする。これほどまでに緊張したことなんてあっただろうか。

さて、もともと私の寝床は用意されていたのだから、私はそこで寝ることにしよう。

一応、と思っているのか、初日に置かれた私専用のカゴベッドは未だそこに置かれている。問題はこのベッドからどうやって降りる

かである。
ベッドの端まで行って見下ろせば、なぜか恐怖心が襲ってくる。
いやいや落ち着け、大丈夫だって。猫のバネを信じろ。ていうか本能を信じろ。
覚悟を決めて、飛び降りるために姿勢を低くする。その時ベッドがきしみ、後ろ脚が沈み込んでバランスを崩した。
短い悲鳴を上げて転がるように座り込み、相変わらずのふかふか感に手こずりながら慌てて体勢を立て直した。
なにがあったのかと振り返れば、上体を起こしてだるそうに座っているラディスがこちらを見ていた。
私の緊張が水の泡だ。起こしてしまった。
思わず固まって見つめ返していると、ラディスは無言のまま私を抱え上げて元の通りシーツにもぐりこんだ。
一言も話さないことに困惑する。いつもなら「どうした」くらい言うじゃないか、こういう時。
しかしそんな困惑も無駄なことだったようだ。なぜなら、隣からはすぐさま寝息が聞こえてきたから。
…寝ぼけてたんかい。
そうだ、ラディスって寝起きが悪いんだった。往生際が悪いといってもいい。
なぜかほっとしつつ、私も諦め悪く抜け出そうとした。が、どうしてか非常に動きづらい。
なんでだ？と首を傾げつつ前進を試みるが、やっぱり動きづらい。あまり動いてラディスを起こしてしまってはいけないので、あくまで慎重に動く。
もう少しで抜けられそうだ、というところではたと気が付いた。
そうか、抱きしめる力が強くなってたんだ。
なにその抱き枕取られた子供みたいな反応。抱き枕はあってるのかもしれないけれど。
若干呆れながらも、先ほどより強引に抜け出たのでラディスが起

きないか心配だった。けれど起き上る様子もないし、寝息は規則正しい。
これなら今度こそ、と意気込んでベッド端までいく。しかし再びベッドがきしむ音がして、前足を上げた状態で固まった。
え、だってさっきまで普通に寝てたのに。
恐る恐る振り向けば、そこにはやはり起き上って私を見ているラディスがいた。しかも、
「…何してるんだ？」
覚醒しているらしい。
眠たげな眼をしながらこちらを見て、わずかに首を傾げる。
固まったまま動かない私をさらに不思議に思ったのか、近づいてきて私の背を撫でた。
「…よくはわからんが、もう遅いんだ。早く寝ろ」
言って、ラディスは私を連れてベッドに入りなおした。三度抱きこまれて、静かに息をつく。
たかだかベッドから出ることが、なぜここまで難しいのか。
考えて考えて、結局そのまま寝入ってしまった。

その15（後書き）

短くてすみません。

その16

相変わらずリズさんが来るより早く目を開けるラディス。が、開けるだけで起きてはいないらしい。結局リズさん頼りだ。
いつも通り朝食を終え、今日はそのまま書類仕事を始めた。
私はと言えば、今日は部屋を出る前に考え事だ。
ラディスのお父さん――陛下は、聞いた話とは違って彼を嫌ってはいなかった。
じゃあなんでそんな話になったんだ？と考えをめぐらせ、特に何か思いつくこともなく項垂れた。
どうにかこの問題解決できないかなぁ…。やっぱり、家族はみんな仲良しが理想的です。
ない頭で考えているとノックが鳴った。ラディスが返事をすると、「失礼します」とディックとライツが入ってきた。どうやら彼ら、入室の礼儀はちゃんとできるようになったらしい。
彼らの手にはいつも通り勉強道具が抱えられている。
「本日もよろしくお願いします！」
「ああ。…いや、今日は少し手伝ってくれ。いいか？」
ぺこりと礼をした二人の頭に向かってラディスが言うと、彼らは明らかに驚いて、次の瞬間には嬉しそうに顔を輝かせた。
「は、ははは！もちろんです！なんでもお言いつけください！！」
「何をお手伝いしましょうか！？」
犬のようにしっぽが生えていたのなら、確実にちぎれんばかりに振っていただろう。それほどにわかりやすく彼らは喜んでいた。
ラディスは机の上にある紙の山を叩き、そんな二人を見た。二人の様子にほんのわずかに笑みながらも、少し硬い声で言う。
「この書類、大体書いたんだが合計は出していない。数が多くて申し訳ないが、合計を埋めていってくれ」

その書類は先日からなぜか合計の欄を空けたまま積んでいたものだった。
このために空けていたんだ…。

場所は変わって応接室。ディックとライツは合計の抜けた書類を持って、ラディスは今日の書類を一部だけ持ってきていた。
テーブルを挟んで二つ置いてあるソファにそれぞれが座り、私もラディスの隣に座る。
テーブルが少し低くてやりにくそうにも感じたが、二人はそんなことも気にせず一心不乱に計算している。
やがて解き終わったのか二人の間に書類が積まれだした。退屈に思っていた私はテーブルに乗り、その書類を覗き込む。数字を追って、首を傾げた。もう一度追って、書類に手を乗せた。
これ、合計間違ってるじゃないか…。
「あれ、あー…っと、ソラ？その手を避けてくれないか？」
どうにかこの書類だけをどかせないかとちょいちょいしていると、ライツが書類片手に困ったように言ってきた。私も困って彼を見返す。間違ったままになんてしたら絶対大変なことになる。
おろおろと書類とライツを交互に見ていると、ラディスが私の手の下にある書類を抜き取り、一通り眺める。
「この字は…ディックか。間違っているぞ」
「え！？」
ディックはラディスから書類を受け取り数字を追っていった。視線が一番下までたどり着き、しばらく固まってまた上に戻る。しばらくそれを繰り返したので、とうとうラディスが訂正箇所を教えた。
「も、申し訳ありません…」
「まぁ、次からは気を付けてくれ」
「はい」
力強くそう応えると、ディックは訂正に取り掛かる。それをじっ

と見ていると、ライツがほぉ、と息を吐いた。
「その子は計算ができるのですか。賢いのですね」
「…そうだな」
頭に重みが乗ったのを感じ振り返ると、ラディスが私を撫でていた。そうして「またあいつらの喜びそうな情報だな…」とつぶやいた。
あいつら…。…ああ、白衣三人衆。
また「調べる」とか言われたら、と思うと、少し憂鬱になってしまった。
「兄上、これでどうでしょうか？」
ラディスは差し出された書類を受け取り、確認する。
「よし。本当に気を付けろよ」
「はい！」
ディックはぱぁっと顔を輝かせて、次の書類を手に取って計算を始めた。私は興味本位でそれを覗き込む。彼はちらりと私を見た後、計算を続けた。
やがて最後の空欄が埋まる。もう一度上から見直して、彼は顔を上げた。と思えば、
「どうですソラ、合ってますか？」
書類を私に向け、口元に手を当てた状態で小さな声でそうたずねてきた。
え、私に聞くの？というかなんで敬語？というかそんな小声で話しても、この部屋には三人しかいない（私はノーカウント）上に静かなのだから聞こえないわけがない。ああほらライツがすごい顔で見てるっていうかライツは本当、ディックを兄だと思っているのかな。
混乱しながら動けずにいると、ディックが急かしてきた。私は慌てて計算する。
そしてある一か所に手を置いた。
おしい。すごく惜しい。最後から三つ目で繰上りが消えている。

計算自体は小学生でもできるような簡単なものだが、桁がすごい。なので間違えるのも仕方がない…と思っておこう。
しかし間違いのままはだめだ。
ディックは私が手を置いたまま微動だにしないのを見て、「もしかして間違ってます？」と尋ねてくる。私は書類を見たままとん、とん、と訂正箇所を叩いた。
彼はそこをじっと見つめて、間違いに気が付いたらしく早速訂正を始めた。
「次は…どうですかね」
訂正し終わったのか再び書類を向けられる。もう一度それを見て確認する。こんどはちゃんとあっていた。
頷くと、ディックは嬉しそうにそれを山に積んだ。
次の書類を取り、計算し、そしてまた私に確認を求めた。それを何度も繰り返す。
…ディックさん、こんなにやっていて、なんで必ず一度は間違えるんですか。
訂正箇所に手を置いたままため息を吐きたくなった。協力できるのはうれしいけれど、こんなことでディックの将来は大丈夫なんだろうか。
ディックって、どう見ても私より年上なんだけどなぁ。なんでこんな心配してるんだろう私。
訂正しているディックを見ていると、またしてもラディスが頭を撫でてくれた。
ものすごく、労わられている気がした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8377n/

青色の猫

2011年10月29日17時00分発行